

# ト\*\*\*ームガジン

二次元

114

今号の  
Special Feature  
特集

# 触手 搾精



試し読み版

18  
未満

別件で同人誌で触手描きまくって、当分触手描がなくていいやーと思ってたら、その後取り掛かった今回の絵が触手祭でした…w

## きらら★キララNTR

魔法少女は変わっていく… THE COMIC

[漫画]雨宮ミズキ [原作]さかき傘 [キャラクター原案]希望つぼめ

無事最終回を迎えることができました。きららちゃん達に幸あれ…! (雨宮ミズキ)

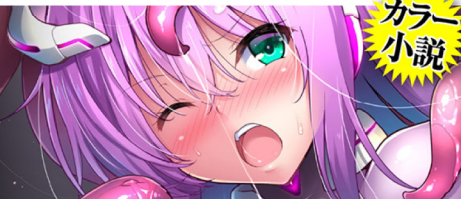


## エージェント・アンジェリア

触手に墮つ

[小説]きー子 [挿絵]しーあーる

ヒロインのちんぽのデカさはおっぱいのデカさに比例すると思っていますが、ちっぺいの子がデカくてむわりと嬉しい。(きー子)



### ●連載&読み切り漫画

#### 学園退魔生徒会長 水無月蘭子

～射精悦楽地獄に墮つ～

[漫画]ぱふえ

今回、敵を早にしたけど「触手で搾精」って所を忘れてました。黒髪セーラー特集しないかな (ぱふえ)



#### Holl×Fall

[漫画]あさなつぐね

普段漫画を描かないので貴重な経験が出来て楽しかったです (あさなつぐね)

#### 特務戦隊カラフル・フォース

[漫画]火愚夜

エロ漫画でフタナリだと遠慮なく大量に搾れるので触手さんも大忙しです。描くのも楽しかったです (火愚夜)

#### 生貨二棒ゲシモノ

[漫画]セレス龍

やっぱり描いて楽しいおっぱいちんぽふたなりサイコーです。(セレス龍)

いつも「超昂神騎エクシール THE COMIC」をご愛読頂きありがとうございます。今号の連載は都合により休載いたします。楽しみにしていただいている読者の皆様、大変申し訳ございません。

### ●特選コラム

二次元GスポットXtasy

ちゆ12歳のひとりえっち

官能小説執筆汁まみれ

～作家のココロ～

美少女コミック雑誌のゲンバ

にやるらのブログ出張版

夢崎

ちゆ

筑摩十幸

稀見理都

にやるら

### ●連載&読み切り小説

#### 呪詛喰らい師外伝

魔鏡白呪

[小説]蒼井村正  
[挿絵]或十せねか

蒼井村正です。最近、ちょっと太ってきて、去年穿けたスポンがちょっときつくなってきました。少し運動してシェイプアップに励みます。(蒼井村正)



#### 奇想魔族ロノウェ

～ボンコツ幹部のヒロインふたなり搾精～

カラー  
小説

[小説]下山ナナヲ一鳴

[挿絵]仙道八

おかげさまでデビュー4年目となりました! これからも頑張ってゾイドを作ります! (下山田ナンプラーの助)

#### 悦獄の巫女

～ふたなり奴隷遊戯～

カラー  
小説

[小説]有機企画

[挿絵]りひと茜

お湯が出なくなったので風呂場を改装しました。肩まで浸かれる湯舟は最高です。(有機企画)

#### 煌翼天使ユミエル

プリズンオブサクリファイス

[小説]黒井弘騎

[挿絵]白う～凧い

ユミエルもマリエルももう長い付き合いですけど、共闘もW陵辱も一度もやってなかったんですね。意外です。(黒井弘騎)

#### 森の女王エレノア

～ふたなりエルフ触手陵辱～

[小説]峰崎龍之介

[挿絵]シロクマA

エルフの女王ふたなり触手搾精貴人外幼女の射精編りを添えて!! (息継ぎなし) (峰崎龍之介)

#### 女冒険者ミルカ

ふたなりの呪いと搾精トラップダンジョン

カラー  
小説

[小説]灯籠

[挿絵]翡翠石

初めまして! 私を育ててくれた「二次ドリ」に参加できて心から嬉しく思います! (灯籠)

### ●今号の特集

# ふたなり触手搾特集



もう逃がさ  
ないわよ!  
一気にケリを  
つけてあげる

しつこい  
退魔師め  
死ねい!



学園は  
世間の目が  
届きにくい  
からと

クンタリーニ  
チャクラ!

隠れていた  
程度の  
ザコ淫鬼め!



むう!!

ハハ

ハハ

キサマ  
その力は!?

開  
眼!!

淫鬼は

必ず  
倒す!!

学園退魔生徒会長

# 水無月蘭子

射精悦楽地獄に墮つ

可憐な美少女退魔師の  
股間を奪われたヒミツ♡



斬

斬

どうにか  
無事に  
退魔任務  
完了！

だけど

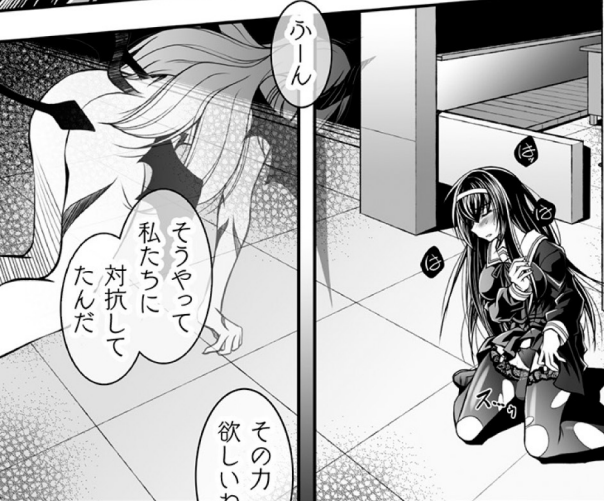


閉じないの...があ... 困りもの... ねっ

毎...回 こうして 鎮めないで



はっ



ふーん

そうやって 私たちに 対抗して たんだ

その力 欲しいわあ



さ...て

チャクラを開くと

生...える... コレを



おはよう  
ございます

あ♡  
生徒会長

おはよう  
ございます

おはよう  
ございます

み皆さん  
おはよう  
ございます

おはよう  
ございます

会長♡  
おはよう  
ございます



昨日  
淫鬼を退治  
できたし

ああ♡朝から  
生徒会長様と  
お話できる  
なんて幸せ♡

いつも  
素敵ですね♡

あ  
ありがと



皆さん  
朝から  
テンション  
高いですね

会長♡

カイチヨ  
—♡

なにか  
良いことでも  
ありましたか?

はい♡



おキレイ  
ですわ  
会長♡

会長♡

…ついでに  
なんだか  
妙だし

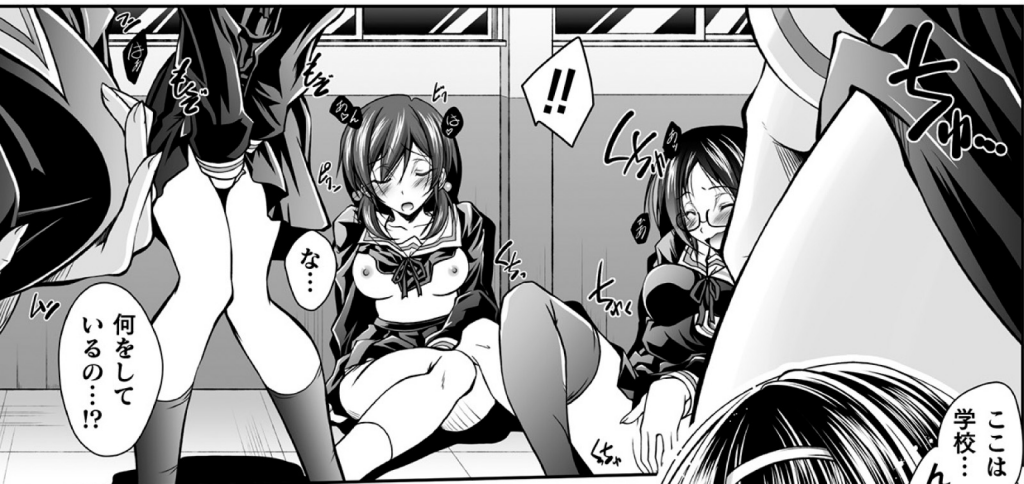
みんな…  
おかしく  
ない!?

ああっ  
可愛い人♡  
会長♡



当分の間は  
ただの学生で  
いられるわね





何を  
して  
いるの...!?

な...

!!

七...  
ち...



ここは  
学校...  
ん♡

あれ?  
なのに...  
ん♡

な...に?  
私まで...

妙な...  
気持ちに

この甘い  
空気

こんなことが  
できるのは  
淫鬼ね!

放課後まで  
待たなくて

御名答♪

本体を  
討ち漏らして  
いたか!!

出てき  
ちゃった♡

昨日の

しかし...  
朝から活動  
するなんて

ビュ

ア

もうアナタ  
恐れるに  
足りない  
からね！  
なんか



カッ

時間をかけて  
これ以上  
淫鬼を衆目に  
晒すわけには  
いかない！！

昨日より  
弱まってる  
けど

カッ  
カッ  
カッ



でも…  
アレを

みんなに  
知られる  
のも…

ええい  
この学園とも  
今日までね！

クンタリーニ  
チャクラ

眼開！

カッ





く…



なにあれ  
なにあれ

勃起…  
してる!?

会長って男  
だったの!?

いや  
女子校だし

女の子なのに  
おちんちん  
生えてるんだ

てっかい



おちんちん…!!  
なんで!?

だ…めっ  
恥ずかしい  
…のがっ

淫気を増幅  
させて…

力が…





うわっ  
すこい

ガチ勃起  
じゃん

ちんぽ  
初めて見た

会長  
やらし



ああん  
すこい♡

タメ!!  
触れては

はあ♡  
会長お

やっ..  
だめ!



アハハハ  
ハハハ!

セイト  
カイチヨウの  
くせに

学校に  
イケナイ物  
持って来てる  
じゃない

みんなあ  
どう思う?



これが会長の  
おちんちん♡

やめっ  
撫で  
ひゃ♡

まぎい!  
みんな淫気に  
あでられで

理性を  
失ってる

見ないでっ  
触らないで  
えええっ

かた〜い

すこい  
脈打ってる

私も..  
人のこと  
言えなく..

ビッチ退魔師VS淫神!  
容赦のないふたなり搾精責めに  
耐えることが出来るか!?



あおいむらまさ  
小説/倉井村正  
NOVEL

あると  
挿絵/或十せねか  
ILLUSTRATION

カーズイーター  
呪詛喰らい師  
魔鏡自呪  
外伝

「なるほど……こいつは厄介だな……ここからでも、歪んだ神気が肌に痛いほど感じられるぞ」

現場に降り立った少女は、ヘルメットとマスクで隠した美貌びぼうの下で、表情を引き締めた。

彼女の名は、常磐城咲妃。

呪詛喰らい師カースイーター、神伽かみとぎの巫女、など、複数の異名を持つ退魔少女だ。

今の彼女のいでたちは、いつもの革帯ボンデージの退魔装束でも、彼女が生徒として通う、私立槐宝学園かいほうの制服でもなかった。

その肢体を包んでいるのは、メリハリに富んだプロポーションを覆い隠すような、かなりオーバーサイズの作業服だ。

足元はゴム長靴、頭部にかぶっているのは「安全第一」と、額部分にプリントされた、黄色の作業用ヘルメット、そして、ゴーグルと厚手の防塵マスクで顔を完全に隠している。

どこに人目があるかわからぬこの時代ゆえ、場違いな美少女が、立ち入り禁止の工事現場に侵入するところを見られぬために、万全の変装を施しているのだ。

（暑い……）。現場に目立たず潜入するためとはいえ、これはちよつとやりすぎだつたかな？ 印象希薄化の呪印を、ちよつと強めにかけるだけでも良かったか）

そう思いつつ、現場へと続く、急ごしらえの歩道を足早に下つてゆく。

目的地は、地下十数メートルのところに埋没していた、古代遺跡だ。

今は周囲を掘り返され、遺跡の入り口は防水シートで覆われている。

ここは、幹線道路から少し外れたところにあるラブホテルの改装工事現場だ。改築ついでに増築もしようと、隣の空き地を掘り返したら、古代遺跡が出土してしまつたらしい。

建築現場で、古代の遺跡が見つかることは、さほど珍しいことではない。

その多くは、学術的な調査と記録が行われ、わずかな遅延の後、工事が再開されるのだが、今回の場合は、退魔機関により、工事の即刻停止と、周辺への立ち入り禁止措置が取られていた。

表向きの理由は、考古学的にも重要な遺跡が見つかったため、となつているが、それがかえつて、考古学マニアの興味を呼び、立ち入り禁止措置が取られていても、ドローンを飛ばしたり、遠距離から望遠レンズで撮影しようとする者が続出

しているようだ。

それもあるって、咲妃は過剰ともいえる変装をして、この遺跡に臨んでいるのだ。（今回も、ネット調査部がいい仕事をしてくれたようだな。封鎖が早かったおかげで、大きな騒ぎにならずに済んだ……）

遺跡に近づくにつれて強まってゆく神気を感じつつ、呪詛喰らい師カリスイーターは胸の内で安堵のつぶやきを漏らす。

咲妃が設立を進言して発足させたネット調査部は、ネット上に溢あふれる怪現象、怪異情報を収集、分析し、退魔機関が対処すべき事案を早期発見するための専門機関である。

今回も、SNS上で話題となった、「ラブホテルの工事現場で連続金縛り事件」を調査した結果、実際に淫神みだらがみによる怪異現象が起きていると判断されて、咲妃への出勤依頼が下されたのだ。

「さて、古き神様にお目通りするとするか……」

作業服姿の美少女退魔士は、防水シートをめくり上げ、遺跡の中に侵入する。

そこは、板状の巨石を組み合わせて造られた、石室墳墓せきしつふんぼのように見えた。

人一人が、身を屈めてやっと通れるほどの狭い通路を数メートル進んだ突き当りは、石室になっていた。

規模はさほど大きくなく、縦横高さともに二メートル四方程度だろうか。

石室内は、照明らしいものは設置されていないにもかかわらず、月夜のような青白い薄明かりに照らし出されていた。

「なるほど、あれが神気の発生源か……」

湿った土の匂いがたちこめた石室内に鎮座した光源は、咲妃の背丈よりも大きな、巨大な鏡であった。

材質は、金属のようでもあるが、よく見ると、表面が水面のように細かく波打っている。

金属板を磨き上げたものというよりは、水銀のような液状の金属が、未知の力で直立して、鏡の姿をしているようにも見える。

「鏡型の淫神か？ 意思疎通が大変そうだが……神伽の儀、参る!!」

凜々しく宣言した神伽の巫女は、着ていた作業服を手早く脱ぎ去った。

まるで脱皮でもするかのように、スルリと脱ぎ落された作業服の下から現れた

のは、薄暗い石室内でも、ほの白い<sup>りんこう</sup>燐光を放っているかのように照り輝く見事な肢体であった。

分厚い作業服を着ていたせいで、かすかに汗ばみ上気した身体にまとつているのは、深紅の革帯を金色の金属環で繋げた、フェティッシュな革帯ボンデーシ。極薄の革帯は、見事に張り出した爆乳を<sup>いまし</sup>縛めながらも突出を際立たせ、バスの先端をかるうじて隠している。

柔軟性に富んだ革帯ボンデーシは、胸に負けず劣らず肉感的な尻の谷間にも深々と食い込み、最低限の面積で秘部を覆って、ただでさえエロチックな下半身の<sup>なま</sup>艶めかしさを強調しているかのようだ。

金環を程よくあしらった革帯コスは、引き締まったウエストや、すらりと伸びやかでありながら、ムッチリとした量感も兼ね備えた美脚にも絡んで、美少女退魔士の肉体を<sup>あて</sup>艶やかに飾り立てている。

「まずは、意志疎通……結縁<sup>けつえんおんせい</sup>音声の儀から……参る!!」

凜々しく宣言し、大きく息を吸い込んだ呪詛<sup>カースイーター</sup>喰らい師の口から、「あ」とも、「は」とも聞こえる音声が長々と紡ぎ出された。



最初は、普段の声と同じ高さで発せられた声は、次第にトーンを上げてゆく。

もし、音楽関係者が咲妃の声を聴いていたら、いったい、何オクターブの音階を発せられるのか？ と、驚きと感動を抱いてしまうほど、高々と澄みきった声が薄暗い石室に響くと、それに共鳴するかのようになり、巨大な鏡がキィィィン!! と金属的な音を発し始めた。

「……結縁、完了！」

発声を終えた神伽の巫女は、呼吸を整えつつ、フツ、と小さな安堵の吐息を漏らす。

石や金属、植物などを依り代とする神の場合、意志疎通のためには、巫女の方から歩み寄る必要がある。

咲妃が行ったのは、そのためのチューニング的な儀式であった。

「御前にかしこみ申し上げます、私は常磐城咲妃、神伽の巫女にございます……」  
巨大な鏡の前に跪いた呪詛喰らい師は、静かな口調で口上を述べる。

「巫女ヨ……我ハ、飢エテオル!!」

金属的な声が、咲妃の頭の中に直接響いてきた。

それと同時に、いくつもの映像が脳裏にフラッシュバックする。

だが、ビデオ映像の超高速早送りを見せられているかのようで、情報処理が追いつかず、淫神とのコミュニケーションに長けた呪詛喰らい師でも眩暈がしてしまふほどだ。

かろうじて把握できたのは、鏡の淫神が、かつては多くの民に崇め奉られていたこと、それが途切れてから、かなりの時間が過ぎていることだ。

「御前の飢え、わが身にて鎮め奉りましょう……。どのような形の伽をお望みでございましょうや？」

神伽の巫女は、冷たく湿った石室の床に平伏し、よく通る声でうかがいを立てる。

「男子ノ精気ジャ!!」

鏡の淫神の要求は、簡潔明瞭であった。

再び、咲妃の脳裏に送られてきた映像は、力強く脈動して、濃厚な白濁の精液を噴き上がらせる、何十本、何百本というペニスの姿。

「ンッ!! くうううンッ!!」

映像だけでなく、噴き上がる精液の放つ熱気や、その、むせ返るような青臭い臭気までもが、全身にザーメンシャワーを浴びせかけられているかのような、異様な生々しきで神伽の巫女 of 感覚神経に伝わってきて、艶めかしい呻き声うめが漏れてしまう。

祀まつられぬまま蓄積されていた精气に対する飢えが、すぐ隣に建っているラブホテルから発する絶頂の波動を受け続けた結果、鏡の神の存在を歪めてしまったのだろうか。

「……かしこまりました……直ただちに支度いたします故、しばしお待ちを……」  
全身にザーメンシャワーを浴びせられたかのような、淫靡いんびな疑似体験の余韻で、わずかに頬を染めつつ立ち上がった咲妃は、股間を覆った革帯をずらし、秘裂に指を這はわせ始めた。

「ンッ……あう……ふぁ……あっ……あああんッ!!」

目の前の巨大な鏡には、いきなり自慰を始めたボンテージ美少女の悩ましげに眉を寄せ、内股気味になって身をくねらせる姿がくつきりと映し出されている。

細くたおやかな美少女の指は、無毛の秘裂にパクリと啜くわえ込まれ、ふつくらと

肉厚な大陰唇だいいんしんのワレメに深々と潜り込み、薄く繊細な小陰唇しょういんしんをなぞり上げて、その頂点に隠されたクリトリスを指の間に挟み込んで扱しじき立てる。

「……間もなく……間もなく……参ります……くふううううんっ！」

たおやかな指に擦られ、挟み揉まれた呪詛カリスイター喰らい師のクリトリスは、たちまちのうちに勃起ぼつきし、限界を超えてムクムクと膨張してゆく。

「ふぁ！ あぁぁ……でっ……出てまいりますっ!!」

甘く上うわずった声を上げ、しなやかなボンデージボディを仰のげ反ぞらせた神伽の巫女は、限界を超えて勃起したクリトリスをきつく摘まみ、グンッ!! と引っ張り上げた。

「はぁぁぁンッ!!」

喜悦きえつに甘く裏返った呪詛カリスイター喰らい師の声が、石室内に響く。

ヌチュツ!! という小さな恥音を立てながら、ボンデージ美少女の股間から引き出されたのは、見事に勃起した男性器であった。

薄紅色に上気し、緩やかな弓なりのアーチを描いて反り返り強張こわばった肉茎の先端では、はち切れんばかりに張り詰めた亀頭が、鏡の淫神が放つ妖しい光に照ら

されて艶めかしく濡れ光り、ヒクツ、ヒクツ、と小刻みにしゃくり上げて自己主張している。

「……ンツ……ハアハアハア……。女人の身ではありませんが、この男根、『<sup>いの</sup>根』にて、御前の飢え、必ずや癒<sup>いや</sup>し奉らせましょう!!」

ふたなり勃起をそそり勃<sup>た</sup>たせたボンデージ巫女は、呼吸を整えたのち、自信に満ちた口調で言上<sup>ごんじょう</sup>しつつ、鏡の淫神に歩み寄ってゆく。

「ご検分……くださいませ……」

魔の前の巨大な鏡には、股間に勃起ペニスをそそり勃たせ、艶やかな笑みを浮かべた呪詛喰<sup>カリススイ</sup>らい師<sup>シ</sup>の姿が、等身大で映し出されている。

「ヨカロウ……検分……シテヤロウ……」

ヌチュ……ズリユリユリユ……ヌパアアア!!

ガラスのように透明な、流体状の触手が、鏡から伸び出てきて、美少女の股間からそそり勃つ勃起をニユルリと包み込んだ。

透明な触手越しに、薄紅色に上気したふたなりペニスがムニユムニユと揉み扱われている様子が透けて見えている。

「んあ！ あああんツ!!」

堪らず漏らした色っぽい叫びが、狭い石室の壁に幾重にも反響した。

シユルルンツ!! ビユルルンツ!!

ふたなりペニスへの強烈すぎる刺激で膝から崩れ落ちそうになったボンデージ美少女の手足に、鏡から伸び出た触手が何本も絡みつき、半ば宙吊りのような状態で拘束する。

(くう!! 覚悟していた以上に、刺激が強い!? 精気を練り上げる前に漏らしてしまわないように、耐えなければ!!)

ギチュルツ、ギシツ、グギギギツ!!

腰が抜けてしまいそうな快感を懸命に堪える神伽の巫女の股間で、透明な触手は、金属の軋むような音を立てて妖しく蠕動し、供物の検分を続けている。

「んあ……あ……あふうう……くううんツ!!」

ビクビクと敏感な反応を見せつける肉茎にまとわりついた流体触手は、勃起の硬度を確認するかのように、キュツ、キュンツ!! と締め付け、ペニスの形を記憶するかのように密着しながらヌルヌルと這い回り、先端の切れ込みから滲み始

めたガマン汁をチュルツ、チュルルツ、と音を立てて吸い取ってゆく。

「ひあ！ アツ……あんツ!!」

敏感極まりないふたなり亀頭の先端を吸い上げられる感触に、触手緊縛されたボンデージ巫女は、宙吊り状態で身悶えてしまう。

「強張り具合……良キ……発スル精気モ……濃ク美味……我ノ飢エヲ満タスニ能  
ウ……」

検分を終えたらしい鏡の淫神の声が、触手に啜え込まれたペニス越しに伝わってくる。

「ふあ!! ……御めがねに適いましたようで、恐悦至極……」

ふたなり勃起の芯まで疼かせて伝わってくる神の声に甘い声を上げてしまいつつ、謝辞を述べる神伽の巫女。

「我が黽<sup>ナゲ</sup>ツテ精ヲ搾ルハ容易<sup>タヤス</sup>イガ、ソレデハ興モ無ク、精ノ練リ込ミモデキヌダ  
ロウ? ……祀リヲ……精ヲ搾ル祀リデ、我ヲ愉シマセヨ!!」

再び、勃起越しの声が響くと同時に、咲妃の姿を映し出していた巨大な鏡面に変化が生じる。

石を投げ込まれた水面のように波紋を描きながら乱れた鏡面が静まると、そこには、どことも知れぬ雑然とした部屋が写し出されていた。

室内には、ソファアに座り、ジャージ姿でくつろいでいる様子の若い男が一人。「これは……いったいどのような趣向でございましたよう？」

神伽の巫女は、隠しカメラか何かで撮影しているかのようなアンゲルの映像を見つつ、鏡の淫神に問いかける。

「我ノ写シ身……汝ラノ言葉デ、『鏡』トイウラシイガ、ソレヲ通シタ景色ヨ。カノ者ノ手デ、精ヲ搾ラセル祀リヨ!!」

煌ッ!! と、強烈な光がカメラのフラッシュのように、雑然とした室内を照らし出すと同時に、それまで、スマホに集中していた男の視線が、こちらを向いた。「……え!? な、何……!?!」

上ずった声を上げて固まった男の顔に、驚きの表情が浮かぶ。

おそらく、彼の目には、鏡の中に写し出された、ボンデー美少女の艶姿あですがたが見えているのだろう。

煌ッ!!



再び、鏡が妖しい光を放つと、強張っていた男の表情が緩み、あからさまな欲情の炎が瞳の奥で燃え上がった。

（鏡を通した遠隔催眠で、理性を飛ばし、欲情させたか!? 飢えて力を失っていても、なお、これだけのことができるとは……）

鏡の淫神の秘められた力の一端を見せつけられ、緊張する呪詛喰らい師カリスィーダーの身体が、鏡に向かってグイッ!! と引き寄せられた。

「あっ!? アアアンツ!!」

冷やしたローションに突き入れたかのような、異様な感触がふたなり勃起を襲った次の瞬間、咲妃のペニスだけが、鏡の向こう側にある室内に、ヌプツ!! と突き出される。

いや、正確には、彼女の勃起は、いまだに、触手に呑み込まれたままだ。

鏡の向こうに突き出しているのは、淫神によって作り出された、咲妃のふたなりペニスのコピー……写し身であった。

「おおお……すっげえ美少女のふたなりチンポ……♪ 超奇麗でエロい形したチンポ……」

もともと、そういう性癖の持ち主なのか、催眠で理性の枷を緩められた男は、欲情全開のニヤニヤ笑いを浮かべて鏡のそばまで這い寄ってくると、鏡から突き出た美少女の勃起に荒い鼻息がかかるほどの至近距離で観察してくる。

どうやら、彼の目からは、鏡から突き出た写し身ペニスが、咲妃自身の股間から生えているように見えているようだ。

「マジでエロいチンポだなあ……ヒクヒクしゃくり上げて、誘ってるのか？」

ふたなりマニアらしい男は、興奮でかすれた声で言いながら、これ見よがしにそそり勃った美少女の勃起に、ゆっくりと手を伸ばしてくる。

「くう……んんんッ!？」

生暖かく汗ばんだ指が、恐る恐るといった様子で勃起に絡んできただけで、咲妃は反応してしまう。

ジワリ、と握ってくる男の指の中で、分身ペニスがビクビクンツ!! と脈打ち、さらに硬度と淫熱を高めて反り返ってゆくのが、異様な快感とともに伝わってきた。

(なっ、なんだ!? 写し身のはずなのに、直接、握られているような感触が…)

扱き吸われる正義と悪のざんげサント!  
お馬鹿なメスガキ幹部は  
今日も敗北射精を放つ?!



奇想魔族  
ロノウエ

ポンコツ幹部のヒロインふたなり搾精

しもやまだ すけ  
小説 NOVEL 下山田ナンプラーの助

せんどうはち  
挿絵 ILLUSTRATION 仙道八

「ふっふっふっ、ついに現れたね、れっこうてんき烈光天姫ウルヴァイス！ 今日こそこの私、魔族六将軍『奇想』のロノ……ぎにやあああああ——！」

激しい光が少女の構えた剣からほとばしり、悪を焼き尽くし消し飛ばす。

平穏な暮らしを脅かす異界の客人は、正義のもとに敗れ去った。

「ぐえええ……！ な、名乗ってる間から攻撃するのはダメじゃない!? それでも正義の変身ヒロインなの……ひいいいい！」

「罪なき人々を傷つける悪に容赦など一切不要です！ 今日こそ正義の名のもと、この私が成敗してやります、女幹部ロノウエ！」

開幕から痛恨の一撃を浴び、ピッチリした黒く扇情的な衣装で肉感的な肌を包んだ金髪の少女は、さらに襲いくる攻撃の中止を醜くも相手に求めるが、それと対比するような白くひらひらで華やかなコスチュームに身を包む凜然とした少女は聞く耳を持たない。

半泣きになって必死に逃れる「悪」に、「正義」は一切容赦せず光の刃を高速で振るいながら彼女を追い回す。

「……ダメだこりゃ、今日も負けムードだぞ俺らの六将軍様は」

「悠長に名乗ってるからなんだよなあ、最近の正義は待つてくれないからね」  
そんな騒ぎを少し離れたところで見ていた、頭に角の生えた立派な体格の男性  
二人は呆れて呟く。

異界から地球侵略にやってきたものの、直属の上司は見ての通りのありさまだ。  
「俺がなんとか時間を稼ぐ、お前はロノウエ様を連れて逃げろ！ あのすいませ  
んヒロインさん、今日のところは俺たちの負けってことでひとつ穩便に、ちよつ  
と待つて待つて、その剣先に光溜めるやつ一回止めてもらっていつすか!？」

「はい撤退撤退！ 敗色濃厚なんだからさつさと逃げましょロノウエ様！ いい  
からゴチャゴチャ言つてないで逃げるんだよおおおおお！」

「いやほんと冗談抜きに、そこまで溜める必要あります!？ 俺たちモブにMPが  
勿体ないっすよお、ちよつとほんとに一回止めて一回止めて一回止めてっば、  
俺たち倒しても経験値おいしくないからギャアアアアアアアアアアア！」

そうして悪の魔族は、三人まとめて正義の光に消し飛ばされた。

「ま、また負けちゃった……いったい私のどこに非があつたのかな……」

「どこにというか、全部につきすよ。七連敗はちよつとシャレになりませんよ」  
人間が暮らす地球とは異なる時空にある、「異界」と呼ばれる場所。

その中の巨大な王城内の一室、研究所を思わせる不気味な空間にて、女幹部と部下二名は渋い顔を突き合わせていた。

「人間界の征服は遅々として進まないね……このままじゃ異界王様に顔向けできないし、あの側近にも怒られる……最悪、六將軍ろくしやうぐんから八傑集はつけっしゅうに降格かも……？」

「大体ロノウエ様の変な思いつきが原因なんだよなあ……」

「這ほう這ほうの体ていで人間界から次元を飛び越え、退却に成功した女幹部であつたが、その美貌びぼうは陰り美しい金髪ツインテールもボサボサだ。」

「うう、私は魔族一の奇才にして大発明家、六將軍『奇想』のロノウエなのに」  
涙を浮かべながら人差し指をつつき合わせる、ロノウエと名乗った少女。

その二つ名通りに常人では思いつかない計略を編み出したり、見たことのない兵器を作り上げたりし、それによって人間界を蹂躪じゅうりんし、人類の希望である変身ヒロインたちを打ち破って魔族の侵略に貢献してきた若き女幹部だ。

しかしながら、現状は無惨な敗軍の将。

「かわい……じゃなくてにつくき変身ヒロイン、烈光天姫ウルヴァイス……！  
あの子さえどうにかなれば、私の担当区域は制圧したも同然なだけだなあ！」

目下の懸案事項は、ロノウエたちが制圧するよう命令された日本の九州全土。  
魔族の侵略に対抗する形で人間の中でも年若い少女たちが変身ヒロインとして  
覚醒していく中、人類はヒロイン統括機関を立ち上げて各地に支部を設置して魔  
族の脅威に備えている。

「途中まではうまくいったのに、本部とやらから派遣されてきたあの子のせい  
で大幅に九州制圧が遅れを取ってる……」

そのうち福岡支部に在籍する変身ヒロインの中でもひとときわ強力な存在、烈光  
天姫ウルヴァイスに彼女らはかねてより手を焼いていた。

「変身ヒロインも最近覚醒ペースが早いからなあ。うかうかしていると単純な頭数  
の問題で、あの地域そのものからの撤退を余儀なくされるよな」

「ロノウエ様も六將軍だけに、発明に頼らなくとも素の力だつてかなりあるんで  
すから、正攻法で戦っても十分あのヒロインと互角以上のはずですよ」

腕を組んでロノウエに諫言かんげんするのは、彼女の側近にして直属の部下である男性魔族、アモンとパイモン。

ロノウエを補佐する——というよりは毎日のように降って湧く発明家の「奇想」こと奇行に振り回され、たいていとばっちりを受ける役目だ。

至極まっとうな助言をした二人なのだが、悪の発明家少女はテーブルをバンと叩いてつっぱねる。

「ダメ、そんな芸のない勝ち方！ 私を誰だと思ってるのかな？ 魔族六將軍が一人、『奇想』のロノウエだよ！ 誰もやらないようなエキセントリックな勝ち方しか私には似合わないの！ ただ勝つだけなら誰でもできるんだよ！」

部下の話を書かない上司に、アモンとパイモンは並んで肩をすくめる。

「計画して行動して、ダメだったところをチェックして改善して、また計画する。そういうPDCAサイクルをちゃんと回しましょうよ。それさえできればロノウエ様があんなヒロインに遅れを取ることはないんですから」

「ほんとそれ。ロノウエ様、思いつきのPとそれによるDだけを永遠に回してるから一向に前に進まないんだよなあ。ハムスターみたい」



「ほあーっ！ うるさいうるさい！ この私の頭脳と奇想に間違いないかあるわけないしあっちゃやならないの！ 今日のは天文学的確率なイレギュラー！」

「天文学的確率が七回続いてるんですがそれは大丈夫なんですかね……」

「君たちさあ！ 上司に対しての敬意とかないのかな!? もうちよつとこう協力的な姿勢を見せてよ！ アメイジングな私の大発明にだねえ！」

地団太を踏んで憤慨する悪の美少女幹部だが、男性二人はそろって白い目を返すばかりだ。

「それは俺らがケガしないで済む発明なんすか？」

「ロノウエ様のしようもない発明に頼るより、俺たちもなんかこう呼吸法みたいなもの身につけた方が早そうな気がしてきたな」

「ちよつとさあ君たちいいい！ ほんといい加減にしたらどうかなあ!？」

軍帽越しに頭から湯気をシュポポポと噴き上げながら、大発明家の魔族は怒り心頭に発する。

「もー、頼りにならない助手だよ！ いや、私が卓越しすぎてるのかな……？ 奇才すぎるあまり周りがみんなダメに見えちゃうという悲しい性……それなら仕

方ない……全部私の頭がズバ抜けてよすぎるがゆえの傑物が背負う業……」

「なんでもいいすけど、俺ら助手じゃなくてたまたま人事異動で配属された直属の部下でだけで、ロノウエ様の研究を手伝うのは任務に入ってないんすよ」

「割り切りすぎじゃない!? そうやってさ、それ僕の仕事じゃないんでって大変な同僚を放って自分だけ帰るドライな若手社員みたいなムーブやめてよお！」

涙目になってロノウエは訴えているが、彼らも彼らで上司の奇行によつて毎回命の危機に瀕しているので対応が塩辛い。

「そんなに有能な助手が必要なら、ロノウエ様自身で作つたらどうですか？」

「は？ そんなのできるならとつくに……ん、いや待てよ……？ それだっ！」

突然の大声にアモンとパイモンがそろつて驚きひっくり返るが、ロノウエは結構いなしだ。新しいおもちゃを見つけた子供のように、大きな目をキラキラさせている。

「助手がいらないなら作ればいいんだ！ ついでにあのウルヴァイスもめちやくちやに犯しちゃう強くて賢い助手をねえ！ 最初からそうすりゃいいんじゃない！」

二人に背を向け、ラボの奥へ走つていきそこに山積みになされていた資材を引つ

張り出し、怪しい薬液漬けにされている得体のしれない生命体を取り出し、まがましい巨大装置を起動させ、大発明家の女幹部は夢中になって作業を始めた。

そんな彼女の毎度の思いつきを、脱力しながら眺めるアモンとパイモン。

「あーあ、変なスイッチ入って一人で何やら始めちゃったよ。いつつもこれだよ、ロノウエ様が美人じゃなかったら、とつくに異動願い出してるよな」

「確かにひどいんだけど、発明家だけあって俺らが何度失敗しても笑顔で許してくれるんだよね。失敗は全部大成功の種なんだよって。その笑顔がなんか癒しさ……俺もしかしてロノウエ様のこと好きなのかな。これが恋なのか……」

「わかる……実際ロノウエ様に優しく童貞もらってほしい……そのために変身ヒロイン捕まえても我慢して……ち、違う、ど、どどど童貞じゃないから俺」

部下二人が上司に恋慕れんぼの情を吐露している先で、自称魔族一の大発明家ロノウエは取り憑かれたように生体をこね回している。

一度集中すると周りが見えなくなる彼女は、彼らの言葉も届かないようだ。

しかしながら一体なにを作っているのか気になって、アモンたちは女幹部に近づいて声をかける。

「あの、ロノウエ様？ 気になったんですがなにを混ぜてるんです？」

「ん？ 異界の魔獣とか、生体同士をくつつける薬剤とか、あとは生きた人間。人間界でいくらでも手に入るし、生きたままの状態の素材は何かと使えるからね。ふんふんふーん、なーにができるかなー」

「う、うへえ……ナチュラルに残酷だな、やっぱ悪の女幹部だった」

捕らえた人間を生きたまま高温の窯の中に投げ込み、ぐちゃぐちゃとかき混ぜてほかの人間や魔獣と融合させていくロノウエ。

何重にも響く悲鳴や、命ばかりは助けてくれと喚く<sup>わめ</sup>彼らの懇願など一切耳を貸す様子がなく、笑顔で鼻歌交じりに練り混ぜている。

そうこうしているうちに、新たな助手が女幹部の手で産み落とされた。

「よおし、完成っ！ さっすがIQ五億五千万の奇才、ものの一時間で有能な助手が誕生だよ！」

「うわぁ気持ち悪っ。なにこれ」

嬉々として立ち上がりガッツポーズをとるロノウエと、その完成品を見て後ずさるアモンとパイモン。

生きた人間数十体を混ぜただけあつてその体躯は異形にして大仰で歪、腕にあたる部分はペニスを模したかのような何十本もの長い触手がウネウネとうごめいている。苦悶の表情を浮かべた人間の顔が半透明な身体のあちこちから浮かび上がっているさまがなんとも不気味だ。

「この有能な助手ヴァプラくんさえいれば、ウルヴァイスなんか目じゃないね！ ああ、自分の頭脳が怖い……怖すぎる！ これが奇才の叡智……！」

「もう名前つけたんすか」

「数十の生体を押し固めた、ちよつとやさつとじゃ死なない生命力！ さらに赤ちゃんぽ触手に媚薬ローション体液まで完備、無色無味無臭で確実に弱らせる発情ガスも吐き出せるよ！ 完璧だ……隙がない……私の頭がよすぎて困る……」

いくらウルヴァイスが強くても、彼女は変身ヒロインであり、変身ヒロインとは女性。すなわち快樂には抗えないという最大の弱点を抱えているのだ。

この新たな助手ことヴァプラを用いて、今度こそ必勝の構えでロノウエは臨む。「絶対にあの綺麗な顔を屈辱に染め上げて、そこからはめちやくちやに犯して涙と精液でべつとべつと汚してあげるんだから。ふ、ふふふ……」

ローレグのビキニショーツに包まれているロノウエの股間部分が、その言葉とともに不自然に盛り上がっていき、やがてファスナーを勝手に開いて女性の股間にあるまじき凶悪な男性器がぶるんつと飛び出した。

彼女はある程度自在に肉体を変化させ、ペニスを生やしたり消し去ったりすることができなのだ。

「この私のふたなりデカちゃんぽで、捕らえたあの子にこれまでの屈辱を全部まとめてお返しだっ……！ めっちゃくちやのどろっどろに犯しまくって、快樂漬けにして私の専用変態ペットに……！ ふふふふつ、あーやつばい、ちんぽ出すと性欲がみなぎるっ……！」

ギンギンに怒張した雄肉棒を引っ張り出してゆるゆるとしごきながら、脳内で正義の美少女ヒロインが敗北快樂に屈して性奴隷宣言をするさまを思い浮かべて恍惚とするロノウエ。

「あつ、この幹部、あのヒロインが欲しいだけだわ。負け続けるあまり執着が妄執になり歪んだ情欲になってるぞ」

「手段が目的になってるんだよなあ……まあ、俺らがとばっちりを受けなければ

なんでもいいけど。本当にこの化け物でウルヴァアイスが無力化できるなら、それに越したことはないし、ロノウエ様を信じるしかないぜ」

アモンとパイモンはそろってため息を吐く。

「よし、こうなったらもう勃起ぼつきが収まんないし、今すぐウルヴァアイスに再戦を挑むよっ！　いくよアモン、パイモン！」

「えええ、今日の今日でまた行くんですか!?　休ませてくださいよ！」

「無理っすよロノウエ様あ、もう筋肉痛で動けないんすよ！」

「いいからっ！　人間界の扉オープン！　レッツゴー博多！」

文句を言う二人をズルズル引っ張って、空間をつなぐ「扉」を生み出し、作っただばかりの異形とともに出撃しようとするロノウエ。その股間にそびえるふたなりペニスは依然として勃起しており、正義のヒロインを犯す気満々だ。

しかしそこで、予期しえぬ事態が発生してしまう。

「ギ、ギググゲッ……」

「んえ、どうしたのヴァプラくん……きゃあああっ！」

不穏なうなり声をあげたかと思えば、生まれたばかりの異形はロノウエへ触手

を伸ばして一瞬のうちに彼女を搦め捕ってしまふ。

「げえっ、ロノウエ様！」

さらに口から大量の粘液をゴパアツと吐き出し、美少女幹部はまともにそれを浴びて全身汁まみれにされてしまった。

「ふああああ！ なっ、なにするのヴァプラくんっ、うええええ、ヌルヌルするううう……！ つて、か、身体が熱い……ま、まずいよお、媚薬がつ……！」

予想外の事態に困惑する甘ったるい体液まみれのロノウエ。

だが触手魔獣ヴァプラはそれだけで終わらず、ペニスをかたどった触手をさらに何本も伸ばして彼女の四肢を拘束し、そのまま空中へ持ち上げてしまふ。

早速生みの親に反旗を翻ひるがえした模様だ。

「ぼ、暴走だ！ どうしよう、仮にも六將軍が作った生き物だぞ、俺らでなんとかなるレベルか？ こうなりや四天王を呼ぶしか……あれ？」

慌てふためくアモンとパイモンだったが、彼らに魔の触手が襲い掛かることはなかった。

ヴァプラが狙った獲物は、ロノウエのみ。





ふむ…

素晴らしいよ  
リヘルくん！

ひと月で  
ここまで吸魔石が  
大きくなるとは！

いやはや  
浄化事業部  
始まって以来の  
成績だよ！

あなた天使のお仕事は…？

凄いな…

あの大きさなら  
バッドエナジー  
1000人分は  
あるだろうな

マジかよ…  
俺なんて  
今月10人すら  
浄化できて  
ないぜ…

流石  
大天使家の  
ご息女様ですわ！

まだ100歳にも  
なっていないの  
でしょう？

若いのに  
素晴らしいわ

がや

# Roll×Fall

ホール×フォール

漫画 / あさなつくね

でも  
あれほどの量を  
一体どうやって  
集めてるのかしら？

言えない！

ホントはただ  
引きこもって…

そうなの♡  
お仕事すっこい  
褒められて！

ポーナス  
出そうだったから

そうそう  
前話してたやつ♡

ライブ えるえる@天使  
みんなでしこし  
8分前に開始  
済みのOLです、友達いっぱい増えるとい  
を表示マ

魔界のオクで  
買ったやつなの♡

えっちな配信  
してるだけなの♡

全世界に  
ひとつしかない  
魔法のオナホ！

オナニーマニア  
垂涎の一品  
『女王の寵愛』！

かーん  
かーん  
かーん

ほんと  
こんなに上手く  
いくなんて

えるえる  
待ってた  
魔界とは？  
かわいい最  
今日も天使  
ちんちんで  
140cm無い

かわいい取向！  
今日も天使コスいい  
魔界とは？ ちんちんで

いんたーねっと  
勉強してて  
よかったあ♡

ええ  
待っ

最初はただ一緒にオナニーしてくれる友達が欲しくて始めた配信だったけど

みてみて！  
これほんとに凄いなだよ！  
これね淫魔の細胞を培養して作られた魔法生物でね！

かほ



淫魔のおまんこをベースに500種類以上の魔法データを合成！  
自在に変形してあらゆるおちんちんをも満足させる最高級品なんだよ！

中でも凄いや機能がこの指輪！



続けてるうちにボクに向かって沢山のバッドエナジーが飛んでくるのが分かったの



魔力を送るだけで従来を超える精密動作が可能で



さらに送った魔力からデータをスキャンして自動で動いてくれたりするの♡

本来性欲から産まれるバッドエナジーなんて薄くてすぐに消えるから誰も集めないんだけど…

ほらほんの少し魔力送るだけで

このうねうね一本一本を自在に動かせるんだよ♡

配信っていう媒体のおかげで一か所に集まってすっごく濃さになっちゃうみたい

マジで生物じゃん！

挿入れてるとこ早く見



この飛んでくる  
数百人のエナジーを  
魔法でボクの体に  
集めておいて

いい調子っ♡  
みんな興奮して  
くれているみたい

リスナーは身も心も  
スッキリ浄化されるし  
ボクは気持ち良くて  
仕事も終わっちゃう♡

高級品なのは分かって

ねっ!

このオナホ  
凄いでしょ!



あとはじこじこして  
精子と一緒に  
取り出せば…♡

なんたって  
給料半年分  
だからね!

使われている  
淫魔の細胞も  
貴重な  
サキユバスクイーン  
のなんだよ!

この肌ざわりと  
香り立つ上質な  
フェロモン…  
もう一生モノの  
逸品だよ♡

大好きなおなにー  
してるだけで  
みんなが幸せなんて  
ほんと最高だよ♡

えへへ♡  
じゃあさっそく  
使っていくから♡

みんなで  
いっっぱい  
しこしこ  
しようね♡

匿名 えるすき  
匿名 楽しみ  
匿名 オナホガチ勢  
匿名 オタク特有の語  
匿名 そろそろシコリ  
匿名 はやく使お?  
匿名 おっぱい見せて  
匿名 ドヤるな  
匿名 えるえる結婚しよ  
匿名 えるえる～

あっごめん!  
そうだよね!





まずは  
このお汁で

おちんちん  
トロトロに  
しちゃうね♡

あはっ♡  
サキユバスクイーンの  
細胞から出た分泌液…♡



うっっ…  
ガチガチに  
勃起しちゃう♡

塗ってるだけで  
頭溶けちゃうしっ♡

しゃんたいち

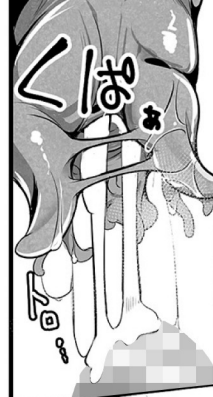


一滴  
飲むだけで  
どんな巨人も  
陥落する  
極上の媚薬♡

草で過かデカ

えへへ…♡  
みんなも  
おちんちんの  
準備出来たかな♡

ガチ勃起し



動きも凄いの♡  
おちんちん  
咀嚼されて...っ♡

なにこれ  
凄い...っ♡

おちんちんに  
ぴったり  
吸いついて  
まるで  
体の一部に  
なっただけみたい...♡

それにこれ...  
指輪からおまんこにも  
感触が流れて♡  
送信だけじゃなくて  
受信もできるの...??





こんなのおまんこにも欲しくなっちゃう...

弄<sup>じ</sup>つてないのに奥がぐちゅぐちゅになって...♡



え...

!? 女ニッ!?



なにこれっ♡ おまんこほじられてっ♡ オナホなのになんでこんな...♡

おちんちんの裏側響いてっ♡ これ作ったひとオナニーガ手勢すぎだよ♡



読み取ったデータ  
こんなところにも  
使われちゃうの…♡

しかもこれ…  
乱暴な動きなのに  
射精しないギリギリ  
で調整されてる…♡



おあ  
せか  
おあ  
おあ



やだ…♡  
オナホに  
射精管理されるなんて  
おかしくなる♡

こんなに  
弄られてるのに  
射精できないなんて  
本当に死んじゃう♡



ふたなり  
奴隷遊戯

# 悦獄の 巫女

えつごく

容赦なき搾精触手に  
嬲られる  
凛々しき夕ナリ巫女!!

小説 NOVEL 有機企画  
挿絵 ILLUSTRATION りひと茜  
ゆうき きかく  
あかね

『マガツカミ』それは人々の信仰を得ることができず、この世に災いをもたらすようになつてしまった邪神たち。

百年の封印から目覚めようとするマガツカミの一柱、苦界姫を再封印するため、白戸神社には幾人もの祈禱師や巫女が集まつていた。

神社の裏手にある洞窟の入口には護摩壇が配置され、夜の暗闇を松明が煌々と照らしていた。木魚を叩く音や数珠を擦る音が聞こえ、途切れることなく念仏が唱えられ続けている。

そうしなければ洞窟の奥から漂ってくる黒煙のような瘴気だけで、命を奪われかねないからだ。

「それでは皆さま、行つて参ります」

「お氣をつけて千草様。私どもも力の限り神氣をお送りします」

涼やかな声で暗い穴の前に立つのは、古来からマガツカミを鎮めるお役目を担う神栖の巫女だ。

（一足先に苦界姫へ挑んだ巫女は音信不通。彼女を救出することができればいいのですが）

彼女の名は天音千草<sup>あまね</sup>。年若くしてこの場にいる誰もよりも優れた才覚の持ち主である。

漆黒の黒髪を腰にかかるほど伸ばし、前髪は切り揃えられている。そのスタイルは抜群で、メロンよりも巨大なバストがたわわに揺れ、ほどよく肉のついたウエスト、むっちりとした熟れたヒップが少女とは思えない色香を放つ。

身体には深紅のレオタードスーツを纏<sup>まと</sup>い、その上から白衣を羽織っていた。風に吹かれ、鈴をあしらった簪<sup>かんざし</sup>が心地よい音色を奏でる。

一般的にイメージする巫女の姿とは少々違っているが、マガツカミの封印で戦いを避けることはできない。

実戦における動きやすさを優先したこの姿が、神栖の巫女の正式な仕事衣装なのである。

（肌を刺すような瘴気。過去に鎮めたマガツカミとは比較にならない化け物のようですね）

ぞわりと身体を震えさせる怖気<sup>おぞけ</sup>をねじ伏せ、千草は洞窟の中に足を踏み入れた。重く湿った空気が頬を撫でる。

千草は指先に神気を集中させ、蠟燭ろうそくのように行く手を照らす灯りにした。神気とは神栖の巫女が持つ魔に対抗する力だ。

札術などを発動するエネルギー源となり、常人には奇跡としか思えない事象を引き起こすこともできる。

千草は灯りを頼りにして、凹凸した岩盤の上を進んでいく。

「きゃあああああああああああああつっ！」

（——この声。近いようですね）

奥から女性の悲鳴が聞こえ、千草は足を早めた。肌を刺す瘴気はドス黒さを増し、全身に纏わりついてくる。



「いや……や、ア、あああああああああああああ！」

洞窟の最奥部さいおうぶ、四角形に開けた空間に獣のような悲鳴が響き渡る。周囲には黄土色に変色した清めの塩や、焼け焦げたお札が散乱している。

壁に手をつけて身をよじるのは、神栖の巫女の少女だ。千草と同じレオタードスーツはボロボロで、肌だけではなく、乳房や股間の淫裂が露出している。

苦界姫の力を侮り単独で再封印を試みた彼女を待ち受けていたのは、敗北の苦痛と地獄の快楽であった。

清らかだった肢体は精液と愛液にまみれ、思わず顔をしかめるような異臭を放っている。

「がぐっ！ 放して……ッ！ ヒイイイイイイイイイイイイン！」

「くふふ、いい声じゃのう。人の悲鳴は何度聴いても心地よい」

口元を袖で隠し笑みをこぼすのは、白髪をおかっぱにした少女だ。日本人形を思わせるような着物姿で、年齢は八歳ほどに見える。

しかし、少女がこの世ならざる者だということは、頭に生えた二本の角と、着物の裾から伸びる無数の触手が雄弁に物語っていた。触手の先端は男性のペニスのように、赤黒く粘液を滴らせている。

「あうっ、ああ……ひぐうううう……っっ！」

巫女少女の露出した双臀は、バックから触手肉幹に突き穿<sup>うが</sup>たれていた。虫のよ

うな生殖器が脈動するたびに、細い裸体が跳ねる。

全身から噴き出した汗が飛沫を上げ、形のよい乳房が激しく揺れる。その表情は頬を赤らめ目尻の垂れたいやらしい雌の顔で、苦悶に混じり恍惚の涎をこぼしていた。

「お願いやめて……壊れる……わたし壊れちゃううう……！」

「主の方から挑みかかっておいて今更泣き言など通るわけがなかるう。まだまだ楽しませてもらうぞ」

「ヒッ……あぐ、グうううううッ！ ギグうううううッ!?」

苦界姫は人間の快樂と苦悶を悦びとするマガツカミだ。三大欲求と同じように本能が陵辱を求め、男女問わず犯さずにはいられない。

淫肉をかき分ける水音は激しくなり、巫女少女の意識は遠ざかっていく。すでに数え切れないほどの絶頂を味わい、心身ともに蕩けきっている。

「死ぬ……死んじゃう……だれかたすけて……」

「無駄じゃ儂からは逃れられぬ。自我がすり切れ塵になるまで付き合ってもらおうぞ」

「あが……ガあ、あああ……!!♡」

細い喉から齒車が軋むような声が絞り出される。苦界姫は触手ピストンのスピードを加速させ、勃起肉は子宮奥を休みなくノックする。

快樂の波は留まることなく上昇を続け、足元は愛液でビショビショだ。

「んひ♡ おっんぐううううううう♡ イグ♡ またいつちやうのおおお  
おとおお♡ あふ♡ へいイイイイイイ♡」

「はははっ！ またイキよつたなこの淫売め」

「おー♡ おー♡ ひゃいひゃいひゃいひゃいっ！♡」

プシヤアアアアアアアアアアアアアアアアと盛大な音を鳴らし、巫女少女は潮を噴き上げた。囚われてから何度も繰り返した絶頂の証拠。

初めは羞恥で頭がおかしくなりそうだったが、最早気持ち良さしか感じる事ができない。

(またイカされちゃった……も、もう無理……墮ちるう……)

苦界姫の陵辱は昼夜問わず続き、巫女少女の心身は剛直と粘液にまみれ、すでに限界を超えていた。

全身の穴という穴は触手に犯され、ドロリと重い精液を注がれている。拘束された状態では、当然トイレで排泄することなど許されず、垂れ流しになった小便と大便が岩盤を汚していた。

（気持ちいいのが止まらないのお♥ イグ♥ イギ死ぬうう…：…つつ！）  
瞳が裏返り、巫女少女は犬のように舌を出す。

厳しい鍛錬によって培われた、神栖の巫女としての矜持きようぢが崩壊する。絶望が心を覆い尽くし、幾度目かの嬌声きようせいが吐き出されようとしたその瞬間、雪が降るように梵字の書かれた札が降り注いだ。

「？ なんじゃ？」

「火生調伏——」

千草の凜とした声が洞窟に響くと、札が意思を持つかのごとく苦界姫と触手に張り付き——。

「爆はぜなさい」

オレンジ色炎を噴き出して爆発した。闇に包まれた洞窟の中が照らされ、巫女少女を犯していた触手も松明のように燃え上がる。



股間の肉竿が消えたことで、華奢な肢体が地面を転がった。

「おや、新しい贅にえが来たようじゃの」

苦界姫は触手を使い、事もなげに着物に付いた炎を払う。その身体は火傷やけど一つ負っていない。

「己の欲望を満たすだけに人を辱める外道。神栖の巫女、天音千草が再封印させていただきます」

多種多様の術式が刻まれた札を構え、黒髪乙女はマガツカミに対峙する。

「その巫女も同じようなことを言っておったわ。その大言壮語を後悔しなければいいがのう」

「言っていないさい。この穴蔵の外には出しません」

視線を逸らさず凍えるような声色で千草は言う。人の世の平和を守るためにも、ここで敗北するわけにはいかない。

投げ出された巫女を一瞥いちべつし、唇を固く引き結ぶ。

（一刻も早く、彼女の浄化をしなくては。そのために——まず、あなたを片付けさせてもらいますっ！）

早急に治療が必要なことを悟る千草。恥辱を味わわされた仲間の想いを背負い、戦いに臨む。

「まずは小手調べじゃ。どう凌ぐ？」

「このように。金生調伏、防ぎなさい」

苦界姫の触手が雪崩ごとく襲い掛かると、千草が札で防御結界を展開するのはほぼ同時であった。

一瞬にして鏡の盾が出現し、触手の力をそのまま跳ね返す。自分自身の力で又ルついた肉幹が弾け飛んだ。

バラバラと肉片と体液が二人の頭上から降り注ぐ。

「ほう、濃の触手を弾くか。その神氣、主のものだけではないな？」

「今のわたしは白戸神社に集まったすべての祈禱師、巫女から神氣を供給されています。たとえあなたでも易々と倒すことはできません」

千草の全身から山吹色の神氣が噴き上がり、瘴氣と触手を後退させる。強い力の波動に苦界姫の顔から笑みが消えた。

「この一撃で終わりにします。あなたはまた眠りにつくのです」

千草の長髪が青白く光ると、指に挟んだ札から尋常ならざる神気が噴き出し、形をつくつていく。

神栖の巫女最強の式神を召喚するために。

「天網恢恢疎にして漏らさず。悪神を降伏し地獄に戻せ、白狼丸！」びやくろうまる

言霊に従い顕現するのは獅子のごとく巨大な狼。四つの眼球が苦界姫を敵と認め、禍々まがまがしい顎あごが喉笛に狙いを定める。

「そいつはさすがの儂でも手こずりそうじゃな。さて、どうしたものか」

「何をさえずろうともう終わりです。いきなさい白狼丸！」

命令に従い白狼丸が苦界姫へ飛びかかる。苦界姫はさらに触手の量を増やし、雪崩のように向かわせた。

「ガルルルルウウウツツ！」

「ぐっ、霊獣ごときに儂の触手が押されるとはな」

白狼丸の周囲に神気の領域が広がり、瘴気を跳ねのける。僧侶千人分の念仏に相当する聖なる力は、苦界姫といえども抵抗することは困難だ。

触手が一瞬で蒸発し、壁際へと後退を余儀なくされる。

「力の差は歴然です。これ以上の戦いは無意味ですよ」

「黙れ。当たり前のように太陽の下を歩く貴様に儂のことなどわかるものか。百年もの間暗闇で過ごす絶望などな！」

「だとしてもあなたを外に出すわけにはいきません！ 神栖の巫女の使命は現世の平和を守ることです！」

神氣と瘴氣が衝突し、ビキビキと洞窟の岩壁にヒビが入る。戦いは依然として千草と白狼丸が優勢で、一歩進むごとに数多あまたの触手が消滅する。

耳まで裂けた罅あきとは、苦界姫の眼前まで迫っていた。

「こんなところで……儂はこんなところでは終われぬのじゃ！」  
「いいえ、これで終わりです！」

千草はすべての神氣を白狼丸に注ぎ、勝負を決めようとする。空気が激しく震え、豊満な乳房やお尻がプルンツとエロティックに弾む。

しかし、牙と突き立てる寸前、苦界姫の前に先程まで犯されていた巫女少女が逆さまに現れた。

触手の一本が彼女の足を掴つかんで吊り上げ、盾にしたのだ。

「——っつ！ 白狼丸、止まりなさい！」

命令に従い、白狼丸はその場で制止する。苦界姫は好機を逃さず触手をくねらせ、千草と白狼丸を拘束した。

「しまっ……は、放しなさい！」

「ふう……惜しい惜しい。あと一歩じゃったな」

四肢に絡みついた触手は強力な瘴気の波動で神気を相殺する。札を使うこともできず、千草は無力な少女になってしまう。

(まずい……っ！ せめて白狼丸さえ使役できれば……)

術者である千草の神気が封印されたせいで、白狼丸も石のように固まっている。触手に触れられている限り、対抗することはできない。

触手は白衣とレオタードスーツを粘液で汚し、服の隙間から中に侵入しようとしていた。

豊満な胸の谷間をペニスのごとく擦り、むき出しの太腿をズリズリと這っている。あまりのおぞましさに、肌が粟立つのを止められない。

「こいつはまだ後で楽しもうかの。さて、どうしてくれようか神栖の巫女。儂に

楯突いた罪は重いぞ？」

先に犯していた巫女をバクリと触手に呑み込ませ、苦界姫は嗜虐しぎやく的な笑みを浮かべる。

「殺しなさい。この道を進むと決めた時点で覚悟はできています」

「なぜそんなつまらんことをせねばならん。見たところ主は中々の上玉のようじやし、儂の遊戯に付き合ってもらおうぞ」

「いやっ、あうううう……っっ！」

触手が動き千草は足をM字に開脚した、恥辱ポーズを強制されてしまう。レオタードスーツが股間と尻タブに食い込み、鼠径部をいやらしく強調する。

「……わたしを辱めるつもりですか。あの巫女のように」

「ふふ、それもよいがもつと面白い趣向を思いついた。主もきつと気に入るはずじゃ」

不穏な笑みを浮かべると、苦界姫はレオタードスーツの股間部分、クリトリスがある位置に、先端が注射針のようになった触手を近づけた。

針の先からは緑色の液体が、不気味な雫を垂らしている。

「っ……なにをするつもりですか」

「それは結果を見てのお楽しみというやつじゃな。案ずるな、すぐに終わる」

「なっ、あ……!!? ぐ……あああああああ……ッッ! はぐ、ううううううううっ!」

針が突き刺さり、鋭い痛み<sup>に</sup>千草は悲鳴を上げた。恥部が燃えるように熱くなり、ビクンッビクンッと腰が跳ねる。

ナメクジが皮膚<sup>を</sup>這い回るような気持ち悪い感覚が、しなやかな総身に広がっていく。

頭の中がぐちゃぐちゃにかき混ぜられ、視界が歪む。黒髪巫女は身体をよじり、ぎゅっと拳を握った。

「わ、わたしになにが……」

数分か数時間か時間の感覚すら忘れる苦痛が終わると、股間に違和感を覚えた。レオタードを肉が押し上げる窮屈な感觸。明らかに自分のものではない。

「……………え？」

股間に目をやった千草の顔が青ざめる。クリトリスがある場所に現れたのは、

見事に勃起した、長さ二十センチ以上もあるフタナリチンポだったのだ。

ビクビクと脈動するそれは、天狗の鼻のように屹立きつりつしていた。肉竿の先端部分では皮をかぶった包莖亀頭が、淫猥いんわいな匂いを放っている。

そのすぐ下にはピンポン玉のように丸い玉袋が二つ並んでいた。毛は一本も生えておらず表面はスベスベしている。

「きゃああああああああつ!! な、なんですかこれは!!」

「大きな声を出すでない。やれやれ、マラが生えた程度のことで大袈裟じゃのう」  
「程度のこと!? こんな気持ちの悪いものを人に生やしておいて!」

グロテスクな肉棒の異様に、黒髪巫女は声を張り上げる。これまでも邪悪なマガツカミと対面してきたが、男根を生やされた経験などあるはずもない。

非現実的な光景に頭がクラクラする。

「マラなんぞ珍しいものでもなからう。まったく巫女という奴は堅物ばかりで困る。もっと男とまぐわるべきじゃな」

「っ……その様子では外せと言っても聞き入れるつもりはないようですね」

「もちろんじゃ。素晴らしい身体になれたことを感謝してほしいくらいじゃな♥」



「くううううう……この外道っつ！」

千草は唇に血を滲ませ、ケラケラと笑う苦界姫を睨んだ。股下で揺れるフタナリ勃起の存在が、乙女の心を切り刻む。

千草にとって男性器など、幼い頃に父のものを見た記憶程度しかない。男の濁った欲望でそり立つ器官など、見るだけで目が腐りそうだ。

「主にはそのチンポを使って儂の遊びに付き合ってもらおう。『フタナリ触手包』でな」

ニヤニヤ笑う幼女。言葉の意味はわからないが、碌なことではないと千草は確信する。

「わたしがそんなことをするとでも！」

「そう怖い顔をするな。もし儂の責めを耐えることができたなら、先程の不敬な行いを見逃してもよい。それに呑み込んだ巫女を解放してやってもよいぞ？」

「ぐっ……」

巫女少女は触手の中に囚われたままで、時折ビクビクと身体を震わせている。それはまだ命があるということ。

人質のことを持ちだされては、千草も黙るしかない。助けることのできる命を見捨てるなど、神栖の巫女の誇りが許さない。

「ふふ、自分に都合が良すぎて怖いか？ なあに僕は面白いことに餓えておるだけじゃ。長い間閉じ込められていて暇なのでな」

そう言うと、苦界姫は火の点いた太い蠟燭を触手に持たせ、年相応の童女のように続きを語り始めた。

「主に生えているチンポは精液と共に神気を排泄するようになっておる。この蠟燭が消えるまでに雫ほども神気を身体に残すことができれば主の勝ち。先程の巫女共々解放してやろう。できぬ場合の処遇は語るまでもなからう？」

（嘘は言っていないように見えます。殺すつもりならこの会話自体必要ありませんから。後はわたしが今言った条件をクリアできるかです）

これが真正銘のラストチャンス。もし嫌だと泣き叫ぼうものなら、この邪神は今度こそ自分と人質を殺すだろう。

あどけない表情の奥に、昆虫のような無機質さを千草は感じ取っていた。

（大丈夫、つまりその……せ、精液を出さなければいいだけです。こんな気持ち

単行本は描き下ろしも収録!!  
7月に発売予定です!!

ありがとう  
繭お姉ちゃん

エマは  
預かるわ

きゆう!  
……  
アメ

さつきの一発で  
たくさんの種が  
浄化されたわ

魔法少女をしている  
きららの親戚 繭

今夜はもう  
出撃の機会は  
ないだろうから  
安心してね

本当だったら  
今頃タダシと一人で  
クリスマス会する  
予定だったのに

守るべき相手が  
ミイさんだけじゃ  
なくなっただけで  
私の力が底上げ  
されたらしい

みんなを  
助けられたのは  
なによりだった

ホフッ

きらら★キララ THE COMIC  
KIRARA★KIRARA  
最終話 NTR 魔法少女は  
変わっていき…

あまみや  
漫画 COMIC 雨宮ミズキ  
のぞみ  
希望つばめ

かさ  
ORIGINAL さかき傘

キャラクター原案  
CHARACTER

あの瞬間は  
タダシのことしか  
考えてなかったから  
ピンとこないけど…

タダシは体調を崩し  
今日のクリスマス会は  
中止になってしまった

あんなことも  
あれば当然かあ…

着信  
タダシ

ん？

もしもし  
なにタダシ？

今日悪かったなって…  
急に体調崩しちゃって

そそっす  
どうせお腹出して  
寝てたんでしょ！

あ…きさら  
外見て

メリー  
クリスマス  
きさら

…メリー  
クリスマス

タダシ



みーんな  
気分悪いとかで  
テンション低くてさ

十萌は空いてる  
かなって

佐山くんには  
ミイさんが  
いるでしょ？

私に何か  
用なの？

クス  
アイツは  
キスまでしかさせて  
くれないしなあ

それにしても  
冷たいな

クリスマスに  
男が女のところに  
来る理由なんて  
一つだろ

!!

クリスマスを  
十萌といたかった  
つてのは

マジだぜ

でなきや  
こんな天気の中  
わざわざ来るかよ

真剣に  
私のことを…？





勝算もなけりや  
来ないよ

それに

キッ...  
ッ



んむっ...っ

ちゅっ...  
っ



知ってるんだぜ  
十萌



最近俺のこと  
意識してるって

だ誰があっ

恥ずかしがるなよ  
俺のこと  
好きなんだろ

やだ  
そんな...っ!

結構おっぱい  
あるんだな

ふーん毛は  
まだなんだ

スル...

へーやっぱかわいいー  
おマンコしてるな

俺ますます  
十萌のこと好きに  
なっちゃうぜ

あめめ.....

あめめ.....

見ないで  
恥ずかしい...

恥ずかしいがなよ  
俺だって  
見せてるんだから

ビキ...

ちがっつひ  
ちがっつひ  
ちがっつひ...







んっ  
…



アッ

アキラへん…  
キスやっほひ上手…



やめて  
…よっ

さっきから  
そればっか

ちちがうもん

あゝ

かーわいいっ

す

あゝ



キスでスイッチ  
入っちゃっただろ

そんなこと  
言うくせに  
そっちからも舌  
絡めてきてたけど？

あっ  
いちゃあ…っ

アッ



ダメ…

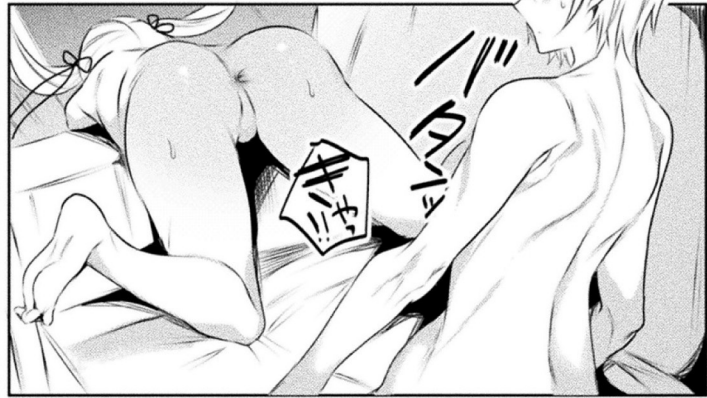
ホント  
拒まなくさぎ…っ

ズ  
ズ  
ッ



へへ

ケツの穴まで  
丸見えだぜ



ズ  
ズ  
ッ

キ  
ヤ  
ッ



あれきつら…  
ひよとして  
処女じゃない？



気持ちいいだろ？  
言えよ  
気持ちいいですって

う…う…



うあッ  
ききぎち…い

この声は  
逆らえない…!

非処女と分かれれば  
興味を失って  
くれるかも！

そそうなの

もうしたことが  
あるの

マジカル☆キララの  
処女を奪ったのは  
アキつくんだけど…！

ふーん

これで  
十萌きりりは  
守れるはず

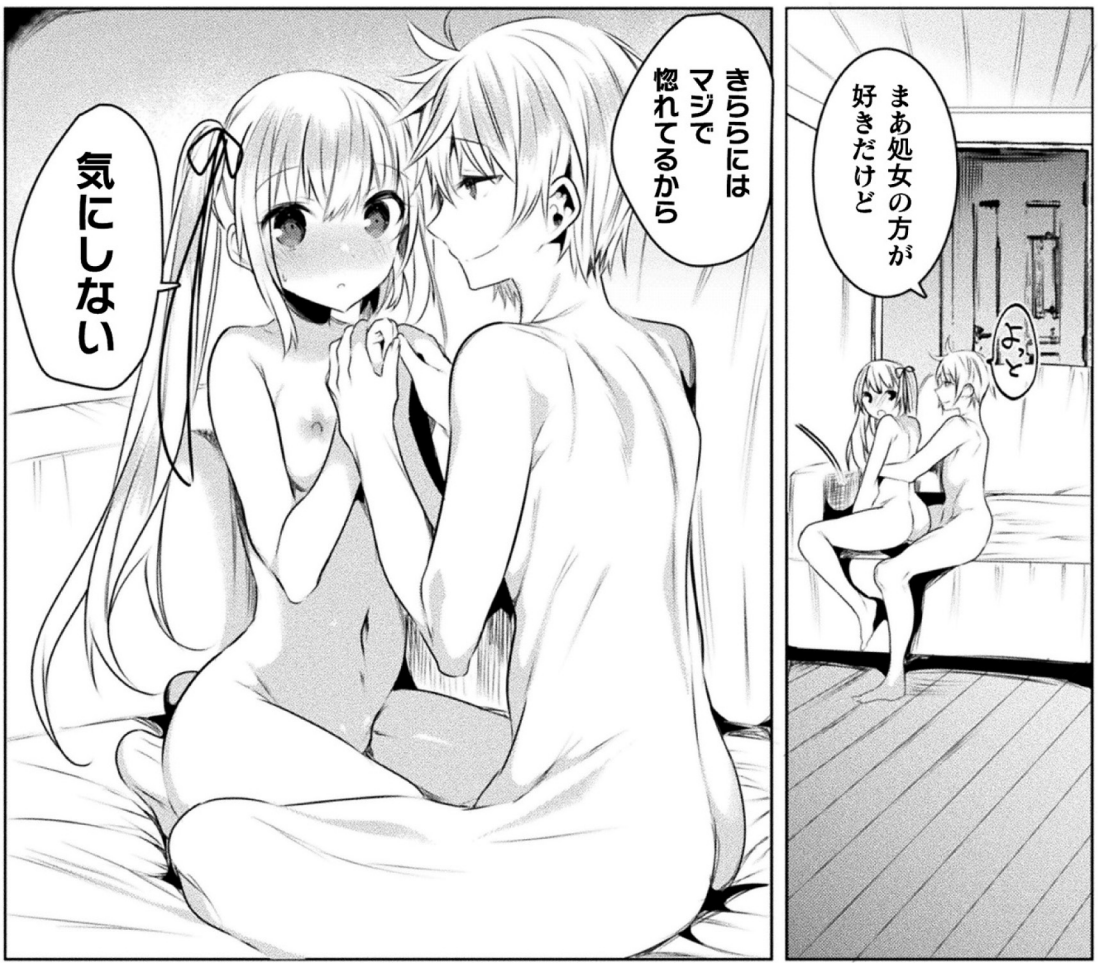
別にいいけど

まあ処女の方が  
好きだけど

ふーん

きりりは  
マジで  
惚れてるから

気にしない



辺境惑星に張り巡らされた罠  
超能力少女のふたなり  
に  
人外の搾精快樂地獄が迫る!!

# エージェント・アンジェリア 触手に墮つ

小説  
NOVEL

と  
きー子

挿絵  
ILLUSTRATION

しーあーる

細く、薄暗い通路を一人の少女が這い進んでいる。まだ幼さを残した顔立ちの、淡い紫色をした長い髪が麗しげな娘だった。

女性的なスタイルが際立つびっちりとしたハイレグスーツに身を包み、豊満な乳房は通路の床に圧迫されてむにゆりと拉ひしゃげている。

しかし彼女の表情は涼しげだった。匍匐ほふくするほどに床と乳房が擦れても顔色一つ変えはせず、人間が通るには狭すぎる通路を淡々と進み続けている。肉体の柔軟さはもちろんのこと、訓練を受けていない人間であれば恐慌状態に陥ってもおかしくない閉塞環境を彼女は物ともしなかった。

やがて冷静さを保ったまま、彼女は通路の底部に小さな出入り口があるのを発見する。そこを覗き込むように見下ろすと、がらんとした白く清潔な空間が目に入る。

少女が通ってきたのは、小型の警備ドローンが巡回に用いる天井裏の通路だった。

「んっ……」

出入り口をこじ開けて柔軟な身体を通す。華奢きゃしゃな脚、腰は難なく通過したが、

特定の一部位が引つかかった。

むっちりと肉感的に育った爆乳だ。

少女は冷静に体重をかけて、スーツがぴっちり張り付いている乳房を狭い隙間に押し込んでいく。

——ぶるんっ、だぶんっ！

そしてついに出口を通過した瞬間、少女のデカパイは歓喜に震えるかのようにぶるんっ跳ね回った。

「目標地点——侵入、成功」

少女は一言クールに呟き、数メートル下の床に無事着地する。室内をぐるりと見渡すが、各フロアとの接続部となっているその部屋を見た限りではこの建物が何なのかは判然としない。

だが、少女はすでにこの施設の正体を知っていた。

「争いの形跡、生存者はともに見られず。……調査を継続する」

正体不明の勢力から襲撃を受けた辺境惑星の研究所、その被害状況を調査せよ——それが銀河連邦から少女、エージェント・アンジェリアに依頼された任務の

内容であった。

人類の宇宙進出から二〇〇余年。現在最も巨大な勢力である銀河連邦はその武力として大規模な軍と警察機構を有しているが、しかし宇宙は広大だ。ゆえに、彼らだけでは対応しきれない小規模な事件や犯罪の疑いがある異変に対し、単独行動を専門とするエージェントが駆り出されることは珍しくなかった。

「——生物反応」

ふと、少女の頭部に装着された髪留め型の白い装飾具が淡い光を帯びる。

これは彼女が持つ力をコントロールする制御具の一部だ。他にも純白の腕輪、脚輪、首輪を装着しているがこれらも全て同様のものである。

制御具の反応は徐々に強まっていた。何者かが接近しつつある証拠だ。

アンジェリアは膝上から足首までをびっちり覆っているレッグスーツの側部に手をかけ、掌大の短杖を引き抜く。それをひゅんつと軽く振ると、少女の身の丈に迫るほどの警杖に変形した。美貌びぼうのエージェントは曲がり角の影に潜み、迫ってくる何者かを待ち伏せする。

ひゅんつ——

と、その時何かが彼女の視界を横切った。

大きさは三〇センチほどで、空中にふわふわと浮遊している。体色はピンク色に近い赤色で、その派手な色を除けばのぞクラゲによく似た姿だ。

「……宇宙生物」

この日初めて、アンジェリアの表情にかすかな困惑がにじ滲む。

正体不明の宇宙生物と相對するのはこれが初めてではない。だが、眼前の奇妙な生き物にどう対処すべきかは即座に判断できることではなかったのだ。

「キュウウウウ——」

クラゲのような生き物が弱々しい鳴き声を発する。胴体の中心にあるつぶらな単眼がぱちぱちと瞬きしていた。

美少女エージェントはただじつと相手を観察する。少なくとも敵意は見られないが逃がすのも得策ではない。

捕獲を試みる。そう決断しかけた時だった。

「逃げてても無駄だ!! 被造物の分際で逆らうんじゃない、大人しくボスのもとに戻るんだ!!」



通路の奥、銀白の自動扉が開いて白衣の男が姿を現す。彼はその周囲に数体、いや十数体ものクラゲに似た生物を引き連れていた。大きさは少女のそばにいるものよりやや大きく、一メートル足らずのものが多数を占める。

しかし最も大きな相違点は、体色が黒に近い濃紺色であることだ。

(……生存者？ いや、正規の職員証を身に付けていない——)

アンジェリアは瞬間的に男を敵と判断し、物陰から飛び出して正対した。

「質問する。貴方は何者だ。所属を答えろ」

「なっ……貴様こそ何者だっ、一体どこからっ!？」

「貴方の目的はこれか」

少女の凜とした眼差しが小型の宇宙生物を一瞥いちべつする。と、それはアンジェリアを庇護者とも思っているように彼女の背後に隠れてしまった。

「キュベレーを渡したまえ！ そいつは我々の実験の成果だ！」

「キュベレー……それがこの生物の名前か」

「大人しく引き渡さねば力尽くで奪うことになるぞ……いや、ここに入り込んだからには何者であろうと生きては帰さん!!」

「できるものならやってみる。……きみは隠れているんだよ」

アンジェリアが小型キュベレーに促すと、彼は返事をするように触手を揺らしてから物陰に潜む。

白衣の男はアンジェリアを睨みながら、ふと顔色を変えた。

「貴様、その姿はもしや……エージエント・アンジェリア！　五光星が一、明星のアンジェリアか!!」

男の瞳に畏怖の色が浮かぶ。

五光星。それは全宇宙において、五本の指に数えられるとされる最強の超能力者のみに与えられる称号。

そして、アンジェリアはその五人のうち、唯一の純粋な女性とされる超能力者であった。

「私をそう呼ぶ人もいる」

アンジェリアは静かに答え、一步踏み出しながら警杖を構えた。

「くっ……行け、キュベレーどもよ！　ヤツを無力化するのだ!!」

男がアンジェリアを指差して命じる。すると男が連れていた紫のキュベレーた

ちは通路の壁面に沿って散開し、少女の周囲を取り囲んだ。

（音声制御が可能なのか。なら、あの脱走した個体は——？）

脳裏に疑問がよぎった刹那<sup>せつな</sup>、紫のキュベレーたちはそれを邪魔するかのよう  
に無数の触手を伸ばした。

——ばちいんっ！

アンジェリアがすかさず身を躲<sup>かわ</sup>すと、一本の触手が鞭のように床を打つ。見た  
目よりも力強い。一度捕まったら逃れることは難しいだろう。

「……やむを得ないか」

アンジェリアが着地した次の瞬間、

ひゅんっ——

と、また別の触手が側面から目と鼻の先に迫っている。

「捕獲が望ましいが、処分させてもらう」

触手が直撃する寸前、少女は光を帯びた警杖を軽く振るった。

——ぼとんっ。

と、切断された肉塊が床に転がってびちびちと痙攣<sup>けいれん</sup>する。

アンジェリアは返す刀で至近の紫キュベレーに接近し、その胴体を通過するよ  
うに警杖を振り上げる。

——ずばんっ！

「な、何っ……!! あれは杖ではないのか!? 何が起こって……」

紫キュベレーは一振りのもとに両断され、不透明な粘液を撒き散らしながら地に落ちた。

レーザーブレードにも勝ろうかという鋭利な切れ味。しかし杖自体に特別な仕掛けがあるわけではない。アンジェリアの念動力によって光を帯びた部位が超高速で振動し、超高周波ブレードと同様の原理で敵を切り裂いているのだ。

（斬った時の感覚……体内に何らかの装置が埋め込まれている？ これで行動を制御しているのか）

となると、先ほどの赤キュベレーは装置が埋め込まれる前に脱走したというところか。アンジェリアは飛び来る触手を掻い潜りながら、二体、三体と至近距離の紫キュベレーを仕留めていく。

「くっ……作戦変更だ！ 脱走個体の捕縛を優先しろ!!」

「なに——」

元々の目的を果たして撤退するつもりか。アンジェリアはその場から飛び去ろうとした紫キュベレーに追撃をかける。

その瞬間、彼女のすぐ後ろから一本の触手が迫っていた。

「——くっ！」

アンジェリアは咄嗟とっさに身を躲すが、触手の先端が首筋を浅く掠かすめていく。

チクツと針に刺されるような痛みがあつたが深手ではない。すかさず態勢を立て直して紫キュベレーを追おうとする——が。

「くっ……!!？」

突然、アンジェリアの下腹部周辺に燃え盛るような熱が巻き起こった。血管がどくどくと脈打ち、全身の血が下半身に集まっていくような感覚。

「あっ、くっ……!!？」

立ってられない。よろめくように攻撃を避けながら、その場に屈み込んでしまう。下腹部の熱と脈動は激しさを増す一方だ。

（もしかして、毒——）

心臓の音が大きく聞こえる。

一分、二分、あるいは十分も過ぎたように思えたが実際には十秒も過ぎていない。アンジェリアが息を荒げて立ち上がった瞬間、男の声が聞こえた。

「くくつ、かかったなアンジェリア！　これがキュベレーの力だ！」

「どういう、ことだ——」

「己の身体をよく見るがいい！　貴様に生えたその醜悪な男性器をな！」

「——え……？」

アンジェリアは男の言葉に耳を疑い、そして次に自らの目を疑う。

男性器。そう、アンジェリアの股間には、確かに隆々とした男性器が出現していた。スーツの中で窮屈そうに勃起ぼっつきしている、女性の身体には本来あろうはずもない醜悪な肉器官——。

「隙を見せたな……！　さあキュベレー、奴のエネルギーを奪い取るのだ!!」

「こんなもの、不愉快なだけ——くつ!!」

四方八方から飛来する触手をアンジェリアは咄嗟に躲そうとするが、その動きは先ほどよりも明らかに鈍っている。数本の触手を捌さばくが、紫キュベレーの本体

を仕留めなければそれらは自動的に再生してしまう。

やがて、回避が追いつかなくなると――

「……くっ、あっ!!」

数本の触手が両手足首に絡みつき、少女の四肢を束縛した。直立姿勢で大の字に拘束されたアンジェリアは瞳を驚きに見開く。

「くくく、こうなればこっちのもの……キュベレーはその異名を『超能力者殺し』  
と言う。アンジェリア、貴様といえどもその力には抗えまい」  
あちが

「……どういうこと。この程度の拘束――」

警杖を握るアンジェリアの手が薄紫の光を発する。

その次の瞬間、際どいハイレグの隙間から一本の触手がスーツの内側にぬるりと滑りこんで男性器に絡みついた。

「あっ……!!」

精神の集中を乱されたことで掌の光が霧散する。その間にも紫キュベレーは次々と美少女エージェントの肢体に群がり、アームスーツに覆われた細腕やレッグスーツに包まれた肉感的な脚にも太い触手が絡みついていく。

(こ、この感覚はなに……？　もしかして、これが男性器の——)  
未知の感覚に戸惑いを隠せないアンジェリア。柔らかな触手に陰茎を締め付けられると下半身に甘やかな痺れしびが走り、この醜悪な肉塊は間違ひなく自らの官能神経と繋がっている器官なのだと思ひ知らされる。

「貴様も知っているだろう、アンジェリア。超能力は女の体にしか宿らず、そして超能力者の多くは両性具有だと。……そして、両性具有の能力者が持つ弱点もな」

「……もしかして、この生物はそのために——」

両性具有の超能力者は概がして出力が高く、純粋な女性の能力者よりも強力な傾向にある。五光星に数えられる超能力者の中で、純粋な女性はアンジェリアただ一人なのもそのためだ。しかし、両性具有の超能力者は女性にはない明確な弱点があった。

「そうだ、そのためにボスはこいつらを生み出した！　両性具有の能力者なら、強制的に射精させてしまえば何も恐ろしくはないのだからな！」

射精——その行為は超能力者にとって、ただ精子を放出するというだけではな



い。能力を用いるために必要なエネルギーをも排出し、回復するまでは大幅に弱体化してしまう泣き所としての意味を持つのである。

アンジェリアはキツと男を睨み、吐き捨てるように言った。

「……どこの変態性欲者の思い付きか知らないが、馬鹿げた真似を。そう簡単に射精などするものか」

「くく、では試してみよう。未知の感覚に耐えられるかね」

少女が身構えるよりも早く触手が伸び、スーツの上からでもくつきりと形が浮かんでいる勃起ペニスの先端に絡みつく。

竿の半ばをぎゅつと握る締め付けも強まると、触手はすかさずふたなりチンポをシゴき出した。

「——ほおっ!! おっ!! んおおッッ……♡」

「おっと、いきなりマヌケな声が漏れてしまっているなあ」

アンジェリアは紫キュベレーに捕らわれたまま身を反らし、艶っぽい唇を丸く開いて悶え喘ぐ。

ゴシゴシと単調な上下摩擦をされているだけだが、射精したこともない敏感ふ

たなりチンポにはそれができぬに効くようだった。

絶妙な力加減のチンポマッサージを受けている最中、比較的小型の紫キュベレーがにじり寄ってきて細い触手で亀頭を撫で回してくる。

「ふおおおっ……♡ こ、これは何っ……！ 未知の感覚っ……ひいいッ♡ く、くすぐったっ……♡」

「クールな顔のわりに刺激にはずいぶん弱いじゃないか。さっきの大口はどうした？ 今にも射精しそうだぞ？」

「だっ……黙れ。射精など……射精などっ、おおおっ♡ んおっ……♡ くお おおおッ……♡」

チンポマッサージが速度を増し、アンジェリアは歯を食いしばって快楽を堪える。スーツの内側からぬちゅぬちゅと粘っこい水音が立つようになり、先端から溢れ出したチンポ汁はスーツの裏地に染み出してしまっていた。

「乳首もビンビンだぞ……くくっ。もし男性器がなければ女として抱いてやりたい美しさだな」

「そんな反応するはずがっ……おおおッ♡ くううっ♡ んっ、ふっ、んう



崩壊するまで魔蟲群に嬲られる  
聖母娘天使！

煌天使 アルズンオス  
翼 サクリフェイス  
エミエル

小説 NOVEL 黒井弘騎

挿絵 ILLUSTRATION 白う〜風い

二話 穢欲の楽園

「……このように、神は仰おつしやられた。尊たき者は卑ひしき者を導く義務と権利がある。即すなわち我々は羊飼ひついである。我々には家畜を育てる義務と扱あう権利があるのだと」  
聖メトセラエ学園中央に位置する大聖堂。厳格な校則によって外界との交流を途絶された学園生活において、若者たちに道徳を説き、悩みの相談やカウンセリングも行う施設だ。

だが現在の時刻は真夜中過ぎ。学園内に誰かが残っているはずなどありえない——はずなのだが。

「これは我がメトセラエの園でも同じこと。上級階層として選ばれし諸君らには、羊飼ひついの義務と権利が同時に与えられる。愚劣な獣に等しき下級階層の学生たちを導く義務と、家畜と同じように扱あう権利がね」

説法のごとく朗々と語り続けるのは、壮年の神父だ。聖メトセラエ学園に赴任する神父である彼の名は二階堂にかいどう。厳格だが誰の相談にも真摯に対応し、淀みない言葉で道を示してくれることから、学生たちから敬意を集めている聖職者である。「諸君。喜び給え。君たちは尊たき上流階層として選ばれたのだ。今宵、諸君らは生まれ変わる。この学園の支配階層として、家畜どもの所有者として！」

「おお……やった！」「俺もついに……ひひひ！」

神父の声に、傍聴者たちが熱っぽい歓声を上げる。真夜中の大聖堂に集うのは、数十名もの男子学生たち。その表情には選ばれし者の歪んだ恍惚こうこつが見て取れた。

「さあ、今こそ聖別の儀式を始めよう。内なる欲望を解放するのだ、そして生まれ変わるのだ……人を超えた存在へ」

歪んだエリート意識を刺激する扇動に、学生たちは心酔する。そして彼が指し示した部屋の一角——まるで供物のように拘束された少女たちへと視線が集中する。

「……………羽連はむら、さん……………」

「……………大丈夫。大丈夫だよ」

夜の大聖堂に囚われていたのは、悠美ゆみと愛奈あいなの二人。

だが、怯える愛奈に対し、悠美は身体からだの自由を奪われながらも、まるでそんな素振りはない。純真な瞳の奥には、正義の怒りが燃えていた。

（影魔えいまの気配がどんどん濃くなっていく……人を超える？ 違うわ、これは人をやめさせる儀式。こんなものが、この学園で行われていたなんて……！）

——時は日夜を遡る——  
さかのぼ

煌翼天使としての正体を知りながら、それでもなお自分を信じてくれた愛奈に、悠美は心を打たれた。

信頼できる、そして尊敬できる友達が、聖メトセラ学園でもできたのだ。

この学園で初めてのの、そして人生で三人目の「友達」——それは悠美にとってとてもなく嬉しいことだった。

（榊さん……この地獄から、貴方を絶対救ってみせる……守ってみせる！）

学園最下層の存在として、奴隷にも等しい扱いを受けていた愛奈。心を開いてくれた彼女から教えられたのは、聖メトセラ学園の恐るべき暗部だった。

『学校の大聖堂……あそこでは『聖別』と呼ばれる儀式が不定期に行われるの。『生贄』に選ばれた女の子は、そこでいつも、たくさんの男の子に……』

悠美と真理が潜伏する教会で、愛奈は涙ながらに自らの境遇を語った。

これがおかしいと誰も感じていないこと自体、超常の事件の証拠。そもそもメトセラエの過酷すぎる校則も、絶対の階級制度も、何もかもが普通ではない。だが学生たちはそれが異常だと認識することもなく、狂った監獄生活を続けている

のだ。

『わたし……あの怪物に襲われて……羽連さんに助けってもらって……やっとわかったの。こんなの普通じゃない、おかしい、つて。でも……どうしようも……』

『……大丈夫だよ、榊さん』

ずっと最下層民として虐げられてきた愛奈は、変身天使とエクリプスとの戦いに巻き込まれ、ついに目が覚めた。

そして、この狂った日常から抜け出すことができたのだ。

『わたしが助けるから……ううん。わたしに助けさせて……榊さんのこと』

『羽連さん………』

そして悠美もまた、自身の正体と過去、そして天使と影魔の真実をすべて打ち明けた。

お互いに辛く悲しい過去を打ち明け合い、受け止め合う少女たち——その絆は固く、尊く結ばれていく。

『わたしたち……友達、だもん。だから絶対……何があっても助けるから』

『羽連さん……ありがとう……!』



そして愛奈の情報から、今回の事件の元凶が、おぼろげながら見えてきた。聖メトセラ工学園には多くのエクリプスが潜んでおり、また日々その数を増やしている。だがそれらは皆、最近影魔へと墮とされた存在ばかり。ある意味、彼らもまた犠牲者なのだ。

この学園のどこかに、狂ったルールを敷き、学生たちの欲望を煽り、人外の魔物へと貶めている元凶がいる——だが学園に潜入しながら、悠美も真理も、その尻尾を掴むことはまるでできなかつた。

エクリプスの気配を察知する能力を持つ天使だが、敵もまたさる者。影魔の中には、完全に人間生活に溶け込み、その片鱗を掴ませないものも少なくない。

だから悠美も真理も、後手後手に回る対処法しかできなかつたのだが——愛奈から齎もたらされた情報は、それを打破しうるものだった。

『聖別の儀式……というのがあるの。学園のヒエラルキーを決定づけて……み、みんなでわたしみたいな落ちこぼれを『生贄』にする……そんな儀式が……』

それは、愛奈にとって思い出したくもない、辛すぎる記憶だっただろう。だが少女は話してくれた。

この学園監獄の根幹を為す、その秘匿された闇の存在を。

『誰が上流階級になって、誰が生贄になるのか……どうやって選ばれてるのはわからない。でも、生贄になった子は、誰かを自分の代わりに差し出さないと抜られないの。でもわたし……そんなこと、できなくって……』

『榊さん……』

唇を噛み、涙を堪え、言葉を絞り出すように告白する愛奈。

自分の欲望に溺れた者ばかりの学園監獄で、この少女は唯一人、自分のために誰かを犠牲にすることを選べず、自己犠牲に殉じてきたのだ。

その在り方は、まるで――

『悠美。やつぱり、榊さんとはいいお友達になれそうね。榊さん、頼りない子だけれど、わたしの娘と仲良くしてあげてくださいいね』

『あつ、ママ……も、もう。そんなんじゃ……』

『羽連先生……はい。わたしも、羽連さんと……友達で、いたいです……』  
教会で話を聞いていた真理が、二人に優しく語りかける。

悠美と愛奈が近づいたことで、事態は、大きく動こうとしていた。

『聖別の儀式……ね。ようやくエクリプスの尻尾が掴めたかしら？ でもまずは……悠美、いいわね？』

『うん。調べないと……もっと、深くまで……』

教師として潜入している真理は、二階堂神父とも近い立場にある。彼女はその立場を利用し、そして悠美は、学生としてのアプローチで調査に望むこととなった。

『榊さん、あのね。お願いがあるの……すごく怖くて辛いことだと思うけど……』  
『……うん。協力する……ううん、させてほしい。こんなの、おかしいって……わたしだって、思ってたから』

そして——事態はここに至る。

今宵の儀式において、愛奈はこれまで拒絶し続けてきた、新たな『生贄』として悠美を紹介したのだ。愛奈自身もまた、儀式への参加は強制されている。

一方で真理は二階堂に近づき、協力者を装って儀式へと参加する運びとなった。こうして今、ついに——聖メトセラ学園の暗部、真夜中の教会で行われる聖別の儀式に、三人は確固たる思惑を持って潜入しているのだ。

「諸君に戸惑いがあるのは理解できる。だが心せよ。尊き者の権利と義務は表裏一体なのだ。家畜の養育には愛情だけではなく、時には厳しさも必要。下等で愚劣な獣には、優れた者による躰しつけが必要不可欠なのだよ」

粛々と語る二階堂の声は、静かながら力強く、確固たる自信に満ちている。そこには、聞くものを陶醉とうすいさせるカリスマ性があった。

「恐れを感じるかね？ 無理もない、諸君らは優れているがまだ若く、経験が足りないからだ。だが、そんな子羊を導くのが神職である我々の役目……そうだね？ 羽連真理くん」

「……はい」

特別に参加を許された真理は、二階堂の助手として、すぐ側に控えていた。

無論、従順なのは表向きだけ——二階堂の言動を注視し、そしてその言葉への反感を気付かれぬように押し殺している。

（やはり影魔の気配は感じないわね。けれどこの男……たとえエクリップスでなかったとしても、度し難い思考の持ち主だわ）

潜入のために女教師に扮している真理だが、本職はシスターだ。迷える人々を

癒やし導く、その立場は二階堂に近い。

そんな彼女から見れば、この男の言っていることは、すべて虚飾に過ぎない。迷える者を救うどころか、誤った道へと導き墮落させる、まるで悪魔の甘言だ。

「では手本を見せよう。若者たちを導くため……その肢体を差し出し給え」

「えっ……あ、ああっ!!」

グイ、と腰に手を回され、力強く抱き寄せられる真理。突然の出来事に声を上げるよりも早く、二階堂の手によって教師服がはだけられ、たわわな巨乳が剥き出しにされる。

「に、二階堂神父!! このような……何をなさるのですか!!」

「言っただろう。愚鈍な獣には躡をする必要があると。君のように不埒な女が、わたしと同じ側に立っているとでも思っていたのかね? それこそ愚かだ、躡が必要なほどにね」

肅々と語りながら、二階堂は真理の胸に手を伸ばした。そのままぎゅうう、と力を込め、爪を立てながら乳房を揉み潰す。

「な、何をなさるの……ふあ、つくう!」

「受け入れ給え。羽連真理くん、君もこの儀式を以て聖別されるのだ……迷える子羊たちを導く存在へ。さあ学生たちに見せてやり給え、君のような愚劣な獣の……雌の幸福とはいかなるものかを」

(ッ！ この……男……！)

表情一つ変えず、まるでモノを扱うかのように、聖母の巨乳を揉みしだく。欲望に突き動かされた獣欲とは違う冷たさに、真理は空恐ろしいものを感じていた。

「ふう、つく！ し、神父……いけませんわ。このような……はう、あうっ！」

「お、おお……すげえ。羽連先生のデカパイ、エロすぎ……」  
「お、俺も……へへ。今日からはああして……雌どもを好き勝手できる立場なんだな……」

だが、それを目の前にした学生たちが抱いた感情は、また違っていた。

厳粛な学園生活で押し込められていた若い欲望にとって、真理の凄艶な色気は、あまりに魅力的だった。それが目の前で乱暴に扱われ、淫らな嬌声きょうせいを搾り取られている——彼らの中にある欲望が、ザワザワと音を立てて暴走しつつあった。

「そ、そうだ……へへっ。これは俺たちの当然の権利。お前たちは俺たちに貪られる家畜に過ぎないんだ……そうだよなあ、榭い？」

「転校生もよお……へ、へへ！ 今日からお前は俺たちの奴隷だ……俺たちがたつぷり教えてやるからな。この学校での身の振り方ってやつをよ、グへへ！」

「……ッ！」

獲物を狙う狼のように円陣を組んだ学生たちが、包囲の輪を狭めていく。

欲望に火が付き、危険な熱量が止めようもなく増幅していく。

「そうだ、恐れを捨てよ。諸君らは選ばれし者、優れた者であり、強く美しき者なのだ。迷う必要はない……内なる己の声に従い、欲望の影を解き放つのだ」

淡々と乳責めを続けながら、朗々と語る二階堂神父。教会の燭台に照らされたその影が、足元からゾワゾワと伸びだしていく。

幾重にも枝分かれし、無数の触手の形を為した異形の影が、学生たちの影に交わると——彼らの影もまた、あり得ざる異形へと変質していった。

「う、うぐっげげげ……ぐぐ、グハアアア！」

「す、すげえ……。力が溢れる……。俺たちは、人間を超えた存在だア……！」

身体が変形し、人の形は禍々しく崩れ去る。凶悪に生え揃う獣の爪牙、甲殻類の如き鋏はさみ。蛇のようはさみのたうつ尻尾に、軟体じみた触手——それぞれがまるで違

う、しかし等しくおぞましい、悪夢の如き怪人へと姿を変えていくのだ。

「君も変わるのだ。快楽にすべてを委ねよ。我が手に抱かれ、欲望を解放せよ」  
二階堂の触手が、真理の身体へも迫る。ストッキングに包まれた肉感的な太ももに、タイトスカート越しにもわかる豊臀に——地面から伸びた影の手が、卑猥ひわいに絡み付こうとする。

「悪いけれど……お断りするわ！」

だがそれらは、聖母の肉体に触れる前に、すべて炎に包まれて焼け落ちた。

「ぬ……!?」

「ついに尻尾を見せたわね……エクリップス！」

凜声とともに、二階堂の手を振り払う真理。同時に煌々こうこうたる炎が燃え上がり、二人もろとも周囲を包み込んでいく。女教師を装うための伊達眼鏡も焼け落ち、鋭い眼光あらいわが顕となる。

「悠美！ その子は貴方が守るのよ。こいつは、わたしが！」

「うん、ママ！」

悠美は拘束を振りほどくと、迫りくる影魔の群れから愛奈を守るように立ち





森の女王

# エレア

Forest Queen Eleanor

ふたなりエルフ触手陵辱

卑猥な穴触手に  
勢いよく逆る魔力  
生やされた怒張で  
快感を貪る儀式

ザンメン

小説 NOVEL **峰崎龍之介**

挿絵 ILLUSTRATION **シロクマA**

「では次の議題に移ります。人間たちが奇妙な動きを見せている、とのことですが……」

「ああ、森の西側ですね。話は聞いています。どどめ色の装束を纏い、踊り狂いながら奇声を上げているとか」

「ええ。いまのところ我々<sup>エルフ</sup>の中に被害者はいませんが、草食動物たちが驚いて逃げ散った形跡があります」

「なにが狙いなのでしょう。まさか精霊樹によからぬことをしでかすつもりでは？」

「わかりません。ただ、警戒は必要かと」

「そうですね。おっと、警戒といえば、忌々しいダークエルフどもが戦の準備をしているとの噂も……」

「頭の痛いことです。……さて、いかがいたしましたでしょうか。我らが女王、エレノア様——」

——などという非日常な報告が実際にあったかといえは、これははっきりとノ——だった。

ほとんどが退屈が生んだ空想にすぎない。事実なのはいまが会議中であることと、最後に呼びかけられたエレノアという自身の名前、そして『女王』という称号だけだ。

ライトエルフ族が治めるリグノア大森林は『精霊樹』が展開する高度な結界に覆われているため、普通の人間は最奥部さいおうぶに近づくこともできない。仮に運良く近づけたとて、棲すみついている肉食獣の餌になるのがオチだろう。

またダークエルフが戦の準備をしているなどあり得ない。ライトエルフとダークエルフが不仲だったのは千年以上前の話で、いまでは向こうの女王とエレノアがこまめに文通する程度には仲がいいのだ。

なにもない——なにも起こらない。それがこの森だ。樹齡三千年を優に超える聖なる大樹、『精霊樹』の加護は強大で、あらゆるイレギュラーはこの最奥部まで届かない。

だから——と。そう纏めてしまうのは少々乱暴ではあるが。

(この会議には意味がない……どうしても、そう思ってしまうわね)

ライトエルフの女王、エレノア・スノーホワイトは、内心でそんなことを呟つぶやい

た。

腰まで伸びた美しい金髪に、ライトブルーの瞳。肌は雪のように白く、顔立ち  
は精巧な人形のように整っている。体つきはスレンダーに寄っているが、胸の膨  
らみは人々の関心を集めるのに十分な大きさを備えている。腹は引き締まってい  
るといふより単純に細く、なのに続く臀部にはみっちりと淫肉が詰まっている。

絵にも描けない——あるいは名匠の絵画も霞む、誰の目にも明らかな美女。エ  
レノアとは、そういう女だった。

纏う衣装は純白。ただし留め具や縁取りには黒も使われている。華美ではない  
が上品な、エルフの女王に相応しい装いだった。

ともあれエレノアは、会議の間ずっと伏せ気味にしていた顔を上げた。

そう大きくもない会議室には数人の臣下が詰めている。週に一度開かれる定例  
報告会議のたびに見る顔だ。議題と同じく、これも変わり映えはしない。エレノ  
アが女王の座に就いて約四十年、ずっとだ。

当然といえれば当然ではある。なにせなにも問題が起きないのだ。人員が変わる  
理由がない。

「——エレノア様？」

と、声をかけられて——これは空想ではなく、実際にかけられた声だ——エレノアは即座に頷いた。

「わかっていますよ。そろそろ『聖務』の時期だと言うのでしょ？」

相手が続きを言う前に、先んじて告げる。すると臣下は『はい』と頷いた。

会議を聞いていなかったのになぜ答えられたのかというと、これは単純だった。ここ最近、顔を合わせるたびに念押しされ続けていたからだ。

『聖務』とはエルフの女王が代々受け継いできた責務であり、儀式のことだった。エルフが潜在的に持つ強大で清純な魔力を精霊樹に捧げ、精霊樹はその見返りに周囲の森ごとエルフ族を守護する。そうした共存関係を維持するための儀式が一定期間ごとに行われ、これを『聖務』と呼んだ。

まあ平たく言えば、『契約の更新』をするということだ。もつともこんなことを臣下たちに言えば、さすがに罰当たりだと怒り狂うだろうが。

ともあれ『聖務』を行うからこそ、女王は女王たり得た。なのでエルフ族の女王は血筋で選ばれることはなく、当代で最も強い魔力を持つ者が自動的に奉り上

げられる。そういう意味では女王と言うより、巫女とでも言った方が正確かもしれない。

「前回の『聖務』からおおよそ十年か。早いものよな。陛下、準備はよろしいですか？」

と、これはこの場にいる家臣の中で最も年嵩としかさの者の発言だった。長命種であるエルフの中でも珍しい、八百歳近い老人である。魔力こそほとんど枯れ果てているが、年の功——もとい、知恵や知識は頼りになる。

「問題ありません。鍛錬は欠かしていませんし……それに、『私』ですよ？」

エレノアは家臣の顔を見ながら即答した。自信に満ち溢あふれた声だった。

『聖務』は十年ごとに行うのが常だ。これはエルフの女王が精霊樹に捧げるに足る魔力を練り上げ、貯蔵するのに相応の時間がかかることに由来している。

だがエレノアの場合は少し事情が違った。彼女は長いエルフ族の歴史の中でも類を見ない、『最高の魔力を持った女王』だった。歴代の女王が十年かけて蓄える質と量の魔力も、エレノアなら数か月で蓄えられる。

だから彼女の場合、『聖務』を毎年行うことも可能ではあった。ただしエルフ

族というのは慣習に敏感なため、これまで十年ごとに行ってきたのなら、それを崩すべきでないと考える者が大半だった。

「ほっほ。でしような。どうか許されよ。歳を取るとつい、嘴くちばしを挟みたくなくなってしまふものでな」

「構いませんよ。いまさら目くじらを立てることでありません」

これといって感情を波立たせることもなく、また肩をすくめるような動作すら挟まずに、エレノアはすべてを許した。

「さて……他に議題のあるものは？」

淡々と、それだけを問いかける。臣下たちは一様に否定の仕草をした。どうやらなにもないらしい。

「では、此度こたびの会議はこれにて終了とします。……聖句を」

彼女が告げると、円卓を囲む臣下たちが一斉に胸に手を当てた。

「——森の静かなるかな。魔力ぼうしよくの豊穰ほうじょうなるかな。命の聖なるかな。精霊樹の偉大なるかな」

『——森の静かなるかな。魔力の豊穰なるかな。命の聖なるかな。精霊樹の偉大

なるかな』

エレノアが聖句を——精霊樹に捧げる誓いの言葉を呟くと、会議室に数人分の聖句が響き渡った。

こんなことがずっと続いている。飽きるほどというのを超えて、飽きてもなお。聞き慣れた言葉の羅列。馴染みのある声。いつまでも変わらない日々。精霊樹が我々に約束した、螺旋のように伸び続ける疑似的な永遠。

(……偉大なるかな)

次々に浮かんでくる皮肉な気持ちを、すべて消し去るつもりで。

エレノアは聖句の末尾を、淡々と胸に刻んだ。



数日後——

エレノアはひとり里を出て、精霊樹のもとに向かっていた。『聖務』を行うためだ。



(ひとりで……転移の術も使わず。歩いて森の息吹いぶきを感じながら向かうべし……別に構いはしません、意味のあることとは思えませんね)

『聖務』にはひとりで向かう決まりになっていた。なぜかは知らない。女王になった時からずっと、そう言い聞かされてきただけだ。恐らくだが、ただの慣習だろう。逆らう意味もないからずっと続いている。

長命種の宿命とでもいうべきか、物事の新陳代謝は短命な種に比べると恐ろしく遅い――

そんなことをつらつらと考えながら、エレノアは淡々と歩を進めた。

ようやく精霊樹が見えてきたのは、里を出て一時間ほど経った頃だった。

精霊樹はリグノア大森林のほぼ中央に位置していた。そこから少し東に外れるとエルフの里がある。両者は地図に起こせばほとんど同じ場所に記されているほど近いが、実際に歩いてみるとこの程度の距離はあるのだ。

ともあれエレノアは、目視した精霊樹の近くまで足を運んだ。ただし近づきすぎないように――慣習によると失礼に当たらない――ある一定のところまで足を止める。

それから声をかけた。

「——いますか、ニフレム」

と、エレノアの声が周囲に響き渡った瞬間。

ぼう……と、精霊樹の幹の後ろから、ほのかに光る球体が現れた。その球体はエレノアの目線あたりの高さをふわふわと飛び回り、やがてぴたりと静止する。

「お久しぶりですね、ニフレム」

エレノアは目の前の発光体に微笑ほほえみかけた。するとぼんやりとした光が薄れていき、その奥から小さな人影が現れる。

「——うん。十年ぶりだね」

そう答えた小さな人影の正体は、『樹の精霊』——いわゆるドライアドだった。ただし通常のドライアドには名前などないし、もつといえれば自我すらない。

このニフレムだけが特別だった。なにせ彼女は『精霊樹』から生まれ落ちた、この森で最も優れた生命体なのだ。

見た目こそ幼い女の子のようだが、実際にはエレノアなどよりも遥かに年上だ。厳密な年齢はわからないが、数代前のエルフの女王の日記に名前が出てきたとい

う話もあるから、少なくとも千歳ほどではないかと、エレノアは推測していた。

「元気にしてた、エレノア？」

「ええ。あなたと精霊樹のおかげで、森はいつでも平穏そのものです。感謝していますよ」

気安い調子で話しかけてきたニフレムに、エレノアは笑みを返した。するとニフレムはもちもちの頬をかすかに赤らめて、

「ふふん、まーね。どんどん感謝していいよ」

どこか楽しそうに言った。恐らくだが、久々の来客が嬉しいのだろう。エレノアとしても悪い気はしなかった。ニフレムは事実上自分よりも年上だが、言動は見た目通り幼く、屈託がない。そんな彼女の態度は、エルフの里で常に敬われる立場にあるエレノアにとつて、心地よいものといえた。

それから少しの間、ふたりは世間話をした。本当は先に『聖務』に取りかかってしまったかったのだが、退屈を持て余していたらしいニフレムが話をしたがった。

「——ニフレム。そろそろいいかしら？」

十数分ほどして。エレノアは頃合いだと判断し、そう切り出した。するとニフレムは頬を膨らませて、

「えー。いいじゃない、もう少しくらい。お互い永い命なんだしさ。急いでも仕方ないよ」

「そう言って、前回の『聖務』を二日も引き延ばされたのを、私は忘れていませんよ」

「ぶー。はいはい、わかりましたよーだ」

ニフレムはまだ不満げだったが、それでも強いて話を続けようとはしなかった。頼りなくも見えるふらふらとした飛び方で、精霊樹に近づいていく。

「じゃあ始めよつか。……あれ？　そういえばエレノア。エレノアが女王になつてから、『聖務』は何回目だっけ？」

くるりと空中で身を翻ひるがえしたニフレムが、小首を傾かしげながら訊きいてきた。

何の意味がある質問なのかはわからなかったが、ひとまず記憶を探り、エレノアは答えた。

「今回で五回目、のはずですが」

カラフルフォース本部

情報部！  
まだ発見できないか

変身ヒロインが  
攫われた本部

すみません  
現場の痕跡を追跡  
していますが  
まだ…

く…了解

引き続き捜索を頼む!!

特務戦隊

カラフルフォース  
Colorful Force

第2話 抵抗不可能!?  
触手搾精の快樂地獄!!

くそ…この設備を  
使っても見つからないなんて

しかじかどうしてなんだ…  
殺そうと思えばいつでも…

だけど奴は彼女たちを  
連れ去った…という事とは

他に何か…目的が…?

漫画  
COMIC

火愚夜

ん...ん ♡

とっても素敵よ  
ヒーローさん ♡



さっきは私のコを  
孕んでもらったけど

あなたは私の  
パートナー

当然あなたのコも  
欲しいワケ♥

ふ…ふぎけるなッ

こんなの…  
早く取りなさい!

もお  
怒っちゃダメよ

せっかくつけたんだから

大丈夫よムリヤリ  
するつもりはないわ

あなたとは思存分  
愛し合いたいんだから…♥

フモ

フモ

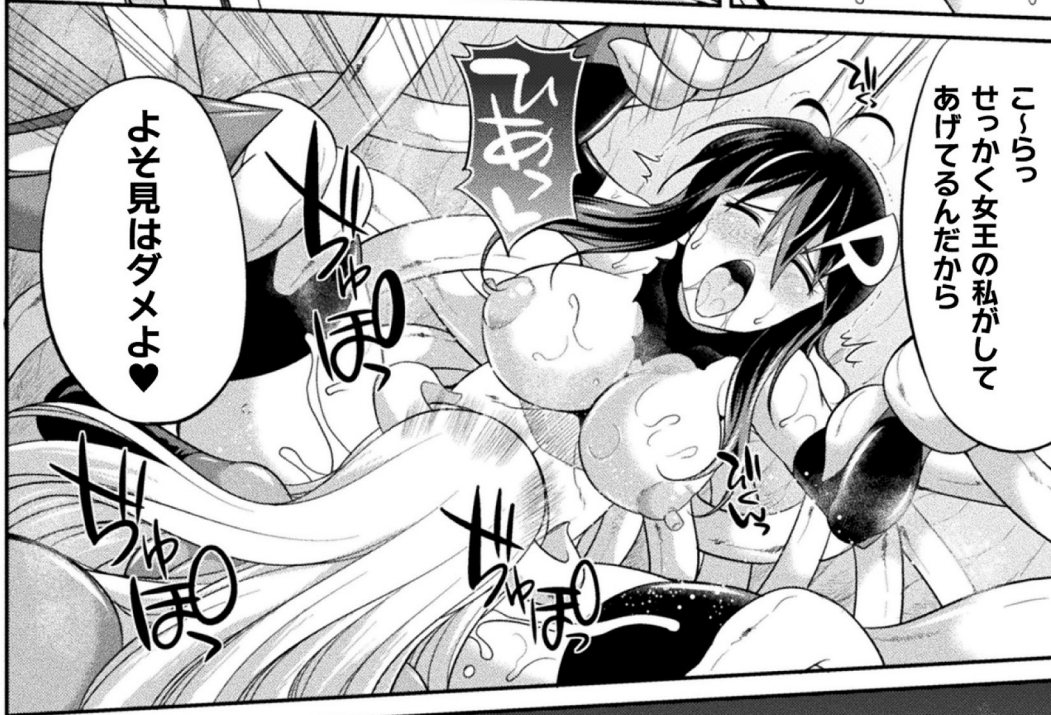
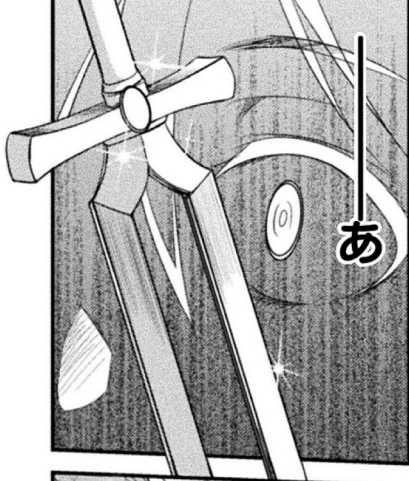
ハハ

ハハ









私のオ・マン・コ。

犯せるね



えっ...な...  
それが...おマ...

ふふ  
いいでしょ

テンタクルスの  
おマンコはこうやって  
自由に動かして

自分から

犯しに  
イけるのよ♥



# 女冒険者 ミルカ

ふたなりの呪いと  
搾精トラップダンジョン

とうろう  
小説 灯龍  
NOVEL

ひすい  
挿絵 翡翠石  
ILLUSTRATION

ふたなり化した女冒険者を襲う  
搾精トラップの数々！



一口に冒険者と言っても、様々だ。

魔物を倒す者、遺物にロマンを抱く者。剣の頂きを目指す者、魔法を扱う者、権謀術数に長けた者——だが、その大体は筋肉自慢の荒くれ達だったりする。

物は違えど、今日もそれぞれの栄光を夢見て、彼らはギルドの集會広間に集う。その目的も実に様々——仲間を求める者、仕事を受ける者、雑談、情報収集、自慢話に……ただ騒ぎたいだけの者まで。そんなことだから、ここは連日賑わっていた。

建物は立派な木造建築だが年季が入っており、ドアが開くと重苦しい軋みが上がった——それも広間の喧騒にすぐかき消されてしまう。

だが、ドアを開けた者がその少女だと分かると、ロビーはその音量を一段階落としたようだった。

後頭部で簡単に纏められた、少し癖のあるブロンド。色白の肌に紅み差す頬と唇。おおよそ、この場には似つかわしくない可憐な容姿。

少女は皆の見守る中悠々と受付カウンターまで歩を進めると、輝く碧眼を細め、そして抱えた荷物をズシリ、と置いた。

「こんにちは。換金お願いします」

「あ、はい。ではこちらの書類にサインを……」

受付嬢に促されるまま、くりくりと癖のある文字で書き付ける。

「えーと……ミル、カ……。って！ あのミルカ・ステンヴァルですか!？」

「ど……どのミルカ・ステンヴァルかな……」

音量控え目だった群衆の中に、幾つかのどよめきが起こる。

二年前に彗星のように現れた孤高のトレジャーハンター、ミルカ。楚々<sup>そそ</sup>とした風貌に謎めいた経歴が手伝って、様々な噂が飛び交っている——まさに今、ここでもだ。

「いやー、ハンナ先輩からお話は聞いていますよ。お会いできて光栄です」

手元では仕事をこなしながら、そして思わずズレてしまったのであろう眼鏡を直しながら、受付嬢はその奥で瞳を輝かせている。

舞い上がっている風の受付嬢に面食らっていたミルカだが、親友の名前が出る  
と、ぱっと明るく笑顔になった。

「ハンナの後輩さんね。初めまして！ ミルカです」

「あ、アタシはアミーって言います！」

二人は握手を交わし、アミーは——余程興奮していたのか、頬を紅潮させ、溢こぼれてしまった涎よだれを啜すすった。

「はっ、ごめんなさい。はしゃいじゃって……手続き自体はこれで完了ですので。お金は後日受け取りにいらしてください」

「はい、了解。それじゃ——」

別れを告げてミルカが立ち去ろうとすると、アミーに呼び止められた。

「あのおう、ミルカさん。あのあの、少しお話しませんか？ アタシ、そろそろ休憩なんです」

「え？ いいけど……」

アミーの誘いで、二人連れ立って街を歩く。最初は照れくさそうにしていたアミーだったが、ミルカが普通の女の子だと分かると饒舌じょうぜつになった。

話題はいくつかあったが、大まかに分けると二つだった。お互いのことと、二人共通の知人であるハンナのことと、そして噂話——。

やはりギルドの受付嬢をやっていると、色々な噂を耳にするのだろうか。ハン



ナも噂話が好きだったけな、とミルカは思う。

「へえー。じゃあ先輩のおかげでギルドに入って、先輩の勧めでギルドを抜けたんですねえ」

「そうそう」

「ギルドや軍の柵しがらみから離れて悠々自適に裕福な暮らしかあ。憧れちゃうな」

「悠々自適なのはそうだけど、そんなに裕福でもないよ？」

「え？ でも今日だってあれだけの遺物を……」

「ちよつと美味しいものを食べるくらいで、残りはほとんど寄付しちゃってるから……」

「ええ!! じゃあ噂は本当だったんだあ!! うわあ……」

勿体もったいないとしても言いたげなアミーだったが、思い出したかのようにポンと手を叩く。

「そうだ。噂と言えば、凄いですよ」

「凄いつて？」

「ミルカ・ステンヴァル超人伝説」

「ぶっ」

「大富豪のご令嬢だとか、冒険中に傷を負った事が無いとか、たった独りで『瘴魔三窟』を踏破したとか、指先一つで爆炎を撒き散らすとか、一瞥いちべつしただけでモンスターを倒したとか……！」

実際のところ、『超人伝説』は枚挙いとまに暇がない。先程ミルカが姿を現した際に起こったどよめきの半分程度はそれであった。

確かに、初探索以来パーティーを組まずにやってきた彼女の实力は謎に包まれている。だが、パーティーを組んでいないのに誰がそれを目撃したと言うのか——当人は困惑し、呆れたように、たははと笑った。

「いやいや、それはさすがに盛りすぎだつて……」

「でもでも、『瘴魔三窟』の件は本当なんでしょう!？」

ギルドからの手続きで挑めるダンジョンは、出現モンスター、構造、罠、その他もろもろの危険度から『格』が付けられていた。

数ある中でも別格に危険度の高い三つのダンジョンを、誰が呼んだか『瘴魔三窟』と言い、最高ランクである『エキスパート』の称号を持つ冒険者でなければ

近づくことすら許されない。

一見普通の女の子であるミルカが全踏破したなど、彼女を知らぬ者に言っても信じては貰えないだろう。

しかし……。

「まあ、ね♪ その部分は……本当っ！」

「キヤーキヤー！ やっぱり！ アタシ、さすがに有り得ないと思って記録調べたんですよ！ そしたらちよーびつくり！」

興奮して手を叩きながら黄色い声を上げるアミーだったが、ふと——真面目な顔になる。

「ミルカさん。とびきりの情報、欲しくくないですか？」

「とびきりの情報……？ なあに藪やぶから棒に」

「フフ、新しく発見されたダンジョンです」

その一言だけでミルカの碧眼が宝石のように輝きを帯びた。しかし、至極真つ当な疑問が口をついて出る。

「新しく発見って、一体何故突然……それこそ藪から棒に」

「これは……エキスパートランクの冒険者の中でも、一部の手練にしか公開されていないんですけど」

と前置きをして、アミーは続ける。

「この間シルヴェリア地方で豪雨があつたでしょう、その時にビゼラ山で崖が崩落したんです」

「山中に埋まっていた遺跡か何かが顔を出したと……?」

「御名答ですよ」

「なんだか胡乱うろんな話ね」

「え? どうしてです?」

「崖が崩れて現れたつてことは、超が付くほど古代の遺跡つてことよね……。そんな場所に造るメリットとデメリットを考えると、どうしてもね」

「なるほど……さすが一流……! まあ、でも」

「でも?」

「大昔の人の考えてることなんて、分からないじゃないですか」

「うーん……それもそうか……。それで、どんな遺跡なの?」

「ええと、数名の調査隊が赴いたんですけど、内部は罠だらけの地下迷宮らしくって、なかなか進めないって。今調査は打ち止めになっているんです」

「なるほどなるほど。……あ、それで私に？」

「ええ。『瘴魔二窟』を踏破したの、しかと聞きましたからね。それに、ハンナ先輩からも、罠解除技術が特に凄いつて聞いてますし。先輩、ミルカさんが居ればなあ、つて歯噛みしましたよ」

「でも勝手に行つて良いの？」

遠慮を装おうとしたところで、見るからに浮足立つトレジャーハンターに、受付嬢は微笑んで言った。

「まだギルドの管理下にはなっていないので大丈夫ですよ。むしろ挑戦して欲しくて情報流したんですからねっ」

「そっか……じゃあ、空いた時に行つてみようかな。ビゼラ山……と」

「そのうちギルドからも冒険者が派遣されると思いますけど、今なら確実に一番乗りですよ」

「一番乗り……か。悪くないわね♪ じゃあ、お言葉に甘えて……早速、今日準

備して明日出発よ！」

「えっ、もうですか!? は、早いですね!？」

「善は急げってね。情報ありがとう♪」

「いえいえ……。道中、くれぐれもお気を付けくださいね♥」

翌日。ピッケルとウォーハンマーの間の子のような長柄武器を杖代わりに、ミルカはビゼラ山へとやって来ていた。

武器らしい武器は、そのハンマーと腰に携えた短刀マチエーテだけだ——それらも武器というよりは、探索用の道具ツールとしての役割が大きいものだ。

携行品も、食糧などが入った小さめのザックとランタンだけ。装備品も、ゴーグルにグローブにブーツと、簡素なものだ。服装はというと、マントこそ羽織っているが、その下はチュートップとホットパンツ、そして体にフィットするインナーのみ——とかなりの軽装だ。ダンジョン探索をするには少々物足りない装備だが、それこそが彼女の自信の表れでもある。

——さて、地図に付けた印の場所にはアミーの言う通り、確かにダンジョンが

在り、内部は罠に満ちていた。それも、発動させてしまえばその場所が安全という訳ではなくて、幾重にもなつて張り巡らされている為、余計に質が悪かった。人並みの冒険者には厄介な構造だが、罠の解除はミルカの得意とするところである。大掛かりなものから精密なもの、果ては魔法罠まで、ミルカに解除できなかった罠は無い。

そんな彼女が今、何をしているかというところ……。

「キシュルルッ！」

「もーっ、しっこいなあ！」

逃げていた。

首だけ振り向いて、追っ手を一瞥する。

噂の真相——いくらミルカが『超人』とはいえ、モンスターを睨みつけただけで倒すなどという芸当はできない。排除が必要と判断すれば、戦闘して退治しているだけだ。

今ミルカを追っているのは、ヒルにタコの脚が生えたような形で、狼くらいの大きさがあるという、何とも気色悪いモンスターだ。しかも、それなりに素早い。

「形は見たことも無いのばっかりだな……。自浄型かな」

『自浄型』というのは、モンスターの分類である。ダンジョンを棲家すみかとしているものは『自棲型』、侵入者を排除しようとダンジョン自体の魔力から生まれた魔法生物は『自浄型』だ。この手の型は、いわゆる『湧き』が発生するのでできる限り相手にしない方が良い。

——だから逃げていたのだが、執拗しつように追って来るものは手に負えなかった。逃げるのにも体力を要する。

やむなく戦闘態勢に入るミルカ。世にも珍しい、幻のトレジャーハンターの戦闘である。

「よし、こつちにおいで」

走る速度を緩め、モンスターを誘導していく。知能の低い魔法生物は簡単に引っ掛かってくれるので、戦闘力とは関係無しに戦闘自体は楽である。

「せいっ！」

ハンマーの先端に付いた刃の穂先でモンスターを牽制けんせいする。槍の一撃がザクリとヒットし、敵は一瞬たじろぐ素振りを見せたが、ハンマーを避けて別角度から



攻撃を仕掛けてきた。

「よ……つと」

それを飛び退いてかわし、直角に方向転換。モンスターも進路を変えて、ミルカの方へと向き直った。

キュルキュルと不気味な音を立てながら、一直線に突進してくる。ミルカは壁際に追い込まれ、ほとんど逃げ場も無くなってしまった——しかし彼女の作戦通りだ。

「ふふ、そこは……」

ガンッ！——ドゴオオオオ！

石床をハンマーで叩くと——そこから烈火が噴き出し、モンスターに襲い掛かった。ちょうど、通り道にあった罠が発動したのだ。

「ギャギャギャッ！」

（うわー結構な威力……。調査も難航するわけだわ）

火炎で相当なダメージを負わせたはずだが、モンスターは突進の勢いのままミルカに向けて突っ込んで来る。

「はいっ！」

ハンマーの石突いしづきを突き立ててテコの原理でかち上げると、モンスターはミルカの頭上を飛び越えて、壁へと激突した。

そしてそこへ——ズドドドド！

対面の壁から夥おびただしい数の矢が飛来し、次々とモンスターを貫いて——憐れな魔法生物は魔力へと還かえり、消滅していった。

「一丁上がり……っと。他のが湧かないうちに先を急ぎますか！」

ミルカにとつては、ダンジョンに備わっている罠を見極めて利用するくらいは造作も無いこと。たとえば平地で戦闘したところで危ういことも無かつただろうが、罠の多いダンジョンこそが寧むじろ彼女の真骨頂であった。

「ふうむ。罠の数は多いけど、この位なら……モンスターも強くないし、結構奥まで潜ってみようかな？ 配置から考えても、良い感じのお宝が眠ってそうだなあ。腕が鳴っちゃうね」

ミルカの独り言に続いて、パシンと上腕を叩く音が石の廊下に響く。

慣れない者が見れば恥ずかしいかもしれないようなこの光景、ミルカにとつて

は慣れたものだった。

パーティーを組んでいないミルカは、自己との対話、すなわ即ち独り言は重要な務めなのである。

独りではどうしても狭くなりがちな思考を整理したり、精神的なケアの役割も果たしている——どんな人間も闇の孤独に長時間曝さらされれば、精神が腐敗していく。それを防ぐ為だ。

それに加えて、発声しながら進むと、副産物もあるものだ。

「うん？ 今、何か違ったような……」

今でこそ一流の冒険者だが、ミルカは石工の娘である。父は職人気質の頑固者だったからか、暮らしは裕福ではなかった。だが幼い頃から家業を手伝い、石に慣れ親しんできたからか——ミルカは、その質の違いくらいであれば簡単に見極められるようになっていた。

即ち、ここの石壁には何かがある。反響音が僅わずかに違うのだ。

手に持ったウォーハンマーで石壁を軽く叩きながら歩いて行くと——。

「あつたあつた。この辺りだ」

ここで問題となるのは、『罨か仕掛けか』という事である。罨であれば避けるか外すかし、通路でもあろうものなら重要な秘密が隠されている可能性が高い。

「……」

コツ。コツ。コツ。ナデナデ……。

叩いてみたり、触ってみたり——石の『感じ』から、なんとなく罨ではないことは察知できる。しかしミルカは、躊躇なく探知魔法を使った。

「罨ではない……と。よし、ここかな！」

そして壁の向こうが空洞であると確信すると、その中心に向け、ハンマーを振りかぶって、横に思い切りスイングした。

ツバギヤーン！

強かに打たれた石壁が崩れ、腰くらいの高さにはぽっかりと空いた穴。そこを覗き込むと、空洞は奥へと続いているようだった。

「よしっ、隠し通路発見♪」

誰に教えられた訳でもなく、ミルカには最初からこれ——『違和感に気付くこと』ができた。彼女は天性のダンジョン探検者なのである。

ギルドからの依頼があり  
とある村に出向くことになった  
剣士・樹里

その依頼とは  
村を襲い女性を  
攫ってしまつ魔物を  
退治することだった

# ふたなり化し 魔物の餌にされる 女サムライ!

この樹里が  
責任持って引き受けるわ

案内してくれるかしら?

…ということだが  
本当に引き受けて  
くれるのかい?  
サムライのお姉さん

女サムライ  
樹里

ええもちろん

# 生贄ニ捧グニ毛



ええお願いね

その魔物はどんな姿をしているの？

とっても  
大きいんですよ

その大ききのせいで  
住処が決まってる  
みたいなんです

依頼を引き受けてくれて  
ありがとうございます

魔物の住処を  
案内しますね

案内人  
由阿奈



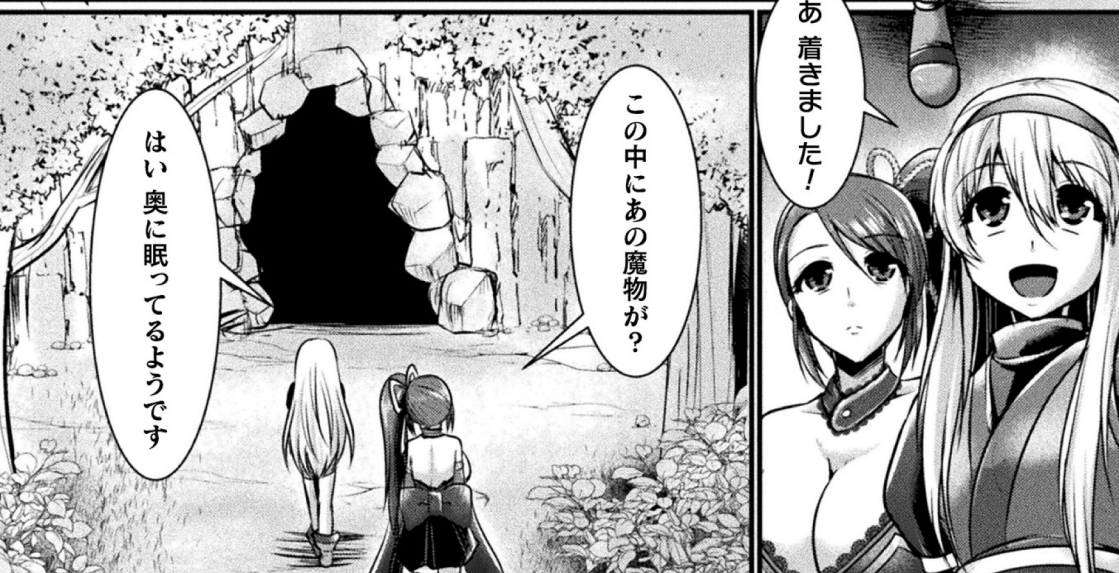
これまで次々と女性たちが  
いなくなってしまうって

この村で女性を私しか  
残ってないんです

そうなの…

かなり深刻のようね

あ着きました！



この中にあの魔物が？

はい奥に眠ってるようです

あちよつと  
待ってください

入る前にこれをお持ちください

これは？

魔除けの薬です

これを飲むと魔物が  
寄り付かなくなりますので

取り巻きの魔物には  
効果があるはずですよ

なるほどね  
一点に集中するには  
良さそうね

いただきわ

う…きい…

苦いほど良い薬になると  
よく聞きますから  
期待はできますよ

ここが魔物の住処です

やっぱり広いわね

でもどこにいるのかしら？  
見当たらないけど

分かりません  
地中に潜んでいる  
んですかね…

!?

え…ちよ…  
何これ…!

樹里さん!?  
どうしたんですか!?

急に身体が熱く  
なってくるっ…!

股の様子が…おかしく  
なってる…何か脳らんて…

え?! いやっ!?!  
何よこれ!?!





おびき寄せするためですよ

これ…男のモノじゃない  
なぜいきなりこんなモノが  
生えてきたの？

まさか…  
さっきの薬のせい！？

まさかこれは  
あなたの仕業なの！？

どういふことなの！？

樹里さん見事に  
引っかけたんですね

こんな話をあつさり  
信じてくれるんだもの

もちろん  
私の可愛いペットを

なんですって…！？  
一体何が狙いなの！？

ズ  
ズ  
ッ



こいつが例の怪物!?

しかも「ズット」って  
びびびびびび

!!



そこなら「ズット」も

はあ!!

倒す方が先よ!



本当にとつともなく  
大きいわね

しかし主な攻撃は触手

この触手を叩き断って

あ

あ

あ

あ

あ

本体に近づいて

決めるっ!!

何これ!?

股がこすれると  
ビクついて  
集中できない

なっ!?

これもおちんちん  
生えてる影響なの!?

しまった!





しまった!  
脚を捕らえられて...!

うあ!!

な!?

生憎ですけど  
この物騒な刀は  
回収させていただきますね

何するのよ!  
あなた一体何を  
企んで...

まずはこの子と  
戯れるといらよ

なんですってっ  
やめて! 放して!

まずいわ  
すぐに斬りつけなければ



ちよっ!  
冗談じゃない!!

どこ触ってるのよ!  
やめて!!

ひゃっ!!

そこはあつ!  
やめてっ! 締め付けないで!!

身体が敏感になってい  
るのに一番敏感なところ  
集中的にこすられてくっ

なんて変態な魔物なの!?

気持ち悪いっ  
早くここから脱出しまし



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<https://ktcom.jp/>**